



Canada, YellowknifeでのAurora。坂本篤志先生撮影（留学レポートP40）

讃 樹 會

令和3年9月1日発行

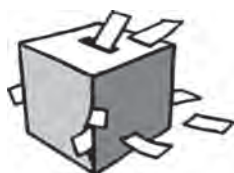
CONTENTS

- 02 会長選挙・理事選挙告示
- 03 同窓生教授就任挨拶
- 12 退任挨拶
- 16 令和2年度会計報告
- 17 令和3年度予算
- 18 理事会議事録
- 19 令和3年度研究助成金／研究奨励金 選考結果
- 20 ニュースの窓
- 22 【特集】卒業記念に思う PART3
- 32 恩師から貴方へ
- 34 関連病院紹介【JCHOりつりん病院】
- 37 トピックス
- 38 追悼
- 40 国外留学助成金 留学レポート
- 44 趣味ざんまい
- 46 創部ものがたり【バスケットボール部】
- 48 10年後の私の10年後
- 50 学会開催報告
- 51 教室便り
- 理事候補推薦用紙／役員一覧
- 65 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 平川栄一郎
編集人 谷 丈二
印刷所 株式会社





令和4年・令和5年度同窓会会長及び理事 選挙告示

選挙管理委員会 委員長 植村 信久

同窓会会長選挙

令和4年3月の任期満了に伴い同窓会会長の選挙告示を行います。
同窓会選挙規定第5条をご確認の上立候補される会員の方は令和3年12月20日までに事務局までご連絡下さい。但し、立候補者一人の場合は信任投票となります。

同窓会選挙規定

第5条 会長選挙立候補者の所信表明開示

- 1 会長選挙立候補者は、所信表明を会報において正会員に開示しなければならない。
- 2 会長選挙立候補者は、正会員の中から少なくとも5名の推薦人氏名を公開しなければならない。

同窓会理事選挙

現在の理事は、令和4年3月に任期満了となりますので、会則9条及び会則25条にもとづき、選挙を施行します。つきましては、各卒年同窓の推薦をお願いします。

会則 第3章 役員

第9条 本会の役員は次の各項によって規定される。

- 1 役員任期は2年で満了とする。但し再選は妨げられない。
- 2 役員は任期が満了した場合においても、後任者が選任されるまでは、その職務を行わなければならない。
- 3 役員に欠員が生じた場合は、その役員の選出母体から役員を選出し、残りの任期を勤める。

会則 第5章 役員および会議の役割

第25条 理事選出は、各卒年同窓の推薦にて理事候補となり、会員の有効投票数の過半数を得て、信任と承認されたものが理事となる。

◆理事選挙の流れ◆

①【理事候補の推薦】

9月号会報で、理事候補推薦用紙をお送りします。

(会報巻末の理事候補推薦用紙を切り離してご利用下さい。)

同期で適任と思われる方の名前を、自薦他薦問わず最多で4名まで記入し11月末日までに返送してください。

返送方法は同封の返信用封筒利用、FAX、メールのいずれでも結構です。

②【理事信任投票】

推薦が出揃いましたら、理事候補一覧を作成し、翌年の2月にお手元にお送りしますので、信任・不信任を記入の上、返送ください。

—お知らせ—

「理事候補推薦用紙」は
会報の巻末に綴じています。
切り離してご利用下さい。

◆◆ 会長選挙及び理事選挙 タイムスケジュール ◆◆

2021年9月	10月	11月	12月	2022年1月	2月	3月	4月	総会開催月
告示		理事推薦・立候補 返信締切 (末日)	会長立候補 締切 (20日)		会長選挙 理事選挙	投票		投票締切

会則及び同窓会選挙規定は讃樹會HPを参照下さい。

(<https://dousoukai.site/sanjukai/kaisoku/>)

今期の執行部、理事名につきましては、本誌巻末の理事推薦用紙裏面又は、讃樹會HPを参照下さい。

(<https://dousoukai.site/sanjukai/yakuin/>)

同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって

～香川から世界に向けて～



香川大学医学部 脳神経外科学

教授 ^{みやけ}三宅 ^{けいすけ}啓介 (平成5年卒・8期生)

2021年4月1日より香川大学医学部脳神経外科学講座の教授職を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。私は1987年4月に香川医科大学医学部医学科(現香川大学)に入学、1993年3月に卒業し、4月より香川医科大学医学部脳神経外科学講座に入局と共に香川医科大学大学院医学研究科にも入学しました。脳神経外科医として研修を行いながら、同時に香川医科大学医学部薬理学講座にて脳腫瘍の微小環境、特に腫瘍細胞の浸潤メカニズムについて研究を行いました。1997年9月に香川医科大学大学院医学研究科を卒業とともに米国国立衛生研究所(NIH)、米国国立がん研究センター(NCI)の滞在研究員として抗がん剤に対する薬剤耐性機構の解明の研究を行い、大腸がんの抗がん剤(Mitoxantrone)耐性株(P-糖タンパクおよびMRP発現を認めない耐性株)より抗がん剤耐性遺伝子であるMXR(BCRP, ABCP1, ABCG2)を発見しました。このMXRを含め他の耐性遺伝子検索による選択的抗がん剤治療、いわゆる個々の患者に沿ったテーラーメイド治療を香川大学医学部附属病院における初の高度先進医療として申請し、現在も行っていきます。2000年2月に帰国し、2004年10月に香川大学医学部附属病院 脳神経外科助手、2012年1月より香川大学医学部附属病院 脳神経外科講師、2016年4月より香川大学自然生命科学系 脳神経外科学 准教授、そして、2021年4月より香川大学医学部脳神経外科学講座 教授として日々奮闘しています。

当講座は1983年4月に開設され、初代教授の大本堯史先生、1991年7月より2代目教授の長尾省吾先生、そして2007年7月より3代目教授の田宮隆先生のもと、医学生をはじめ、初期研修医、専攻医、若手医師に対して充実した教育・研究・診療を行ってきました。

教育については、医師として、脳神経外科医として専門性の高い知識と堅実な医療技術の習得に加え、現在の国際化・情報化社会に対応でき、人としての優れた倫理観を持つ優秀な医療人を育成したいと考えています。

研究について、特に基礎的研究を行うことは科学的思考力や洞察力を養う上で臨床医にとってもあるいは臨床の場においても非常に有用であると考えています。現在は、薬理学教授の西山成先生と膠芽腫における(プロ)レニンレセプターの発現や膠芽腫に対する希少糖の効果の研究をはじめ、悪性脳腫瘍に対する遺伝子治療の研究、脳腫瘍の薬剤耐性遺伝子の研究、神経膠腫におけるTERTおよびTERT Promoterの発現、PETによる脳腫瘍や脳血管障害に対する最新診断および治療効果判定、頭部外傷における脳浮腫の研究、香川大学 創造工学部との共同研究であるロボットによる血管撮影装置の開発など取り組んで参ります。そして、コロナ禍終息後に若い先生が海外で研究できるよう、今から環境を整えていきたいと考えています。

臨床において、香川大学医学部附属病院は四国地区の中核病院の一つであり、常に最も良質かつ高度の医療の提供が求められています。脳神経外科は、患者さま中心の良質かつ最新の低侵襲な脳・脊髄・末梢神経の治療を扱う幅広い診療を行っており、救命救急医療、脳卒中・脳血管障害、そして脳腫瘍、小児神経、脊椎・脊髄外科、機能的脳神経外科に対する医療、これら3本を柱として診療を行っています。現在、救命救急センターに脳神経外科専門医を3名派遣しており、脳卒中、頭部外傷、てんかんなどの疾患に対して治療を行っています。私は香川大学での脳死判定を全例行ってきましたが、引き続き迅速に対応し、臓器組織提供・移植医療に貢献したいと考えています。2022年4月よりDoctor Heliが運航予定です。頭部外傷を含め災害医療に対してもサポートできればと考えています。2019年に脳卒中・循環器対策基本法が成立し、国民からの脳卒中医療への期待が高まっているとともに、治療として血管内手術が脳卒中に対する最先端治療として著しい進歩を遂げています。当科は全国でも有数の脳血管内手術施行施設であり、引き続き最新の血管内治療を提供して参ります。脳腫瘍治療は、複数のPET検査を用いた脳腫瘍の最新診断および治療戦略、

ナビゲーション・モニタリングシステム、術中MRI検査等低侵襲で安全で正確な脳神経外科手術をめざしています。また、悪性脳腫瘍に対しては、薬剤耐性遺伝子検索に基づいた化学療法（いわゆるテーラーメイド治療）を推進しています。神経内視鏡を用いた経鼻的下垂体腫瘍摘出術をはじめ、外視鏡等head-up surgeryに取り組み、脊髄・脊椎疾患に対する低侵襲手術やパーキンソン病に対する定位脳手術など充実させたいと考えています。

浅学菲才の身ではございますが、第4代香川大学医学部脳神経外科教授として香川大学医学部脳神経外科学講座の発展および人材育成、そして若い先生の海外展開へ全力を尽くす所存です。

今後とも一層のご指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴

平成5年3月 香川医科大学医学部医学科卒業
 平成5年4月 香川医科大学医学部脳神経外科入局
 香川医科大学大学院医学研究科入学
 平成9年8月 米国国立衛生研究所滞在研究員
 （～平成12年2月まで）
 平成9年9月 香川医科大学大学院医学研究科修了
 平成12年3月 香川医科大学研究生（～平成16年9月まで）
 平成16年10月 香川大学医学部附属病院（脳神経外科）助手
 平成19年4月 同 助教
 平成21年4月 香川大学医学部（脳神経外科学）助教
 平成24年1月 香川大学医学研究院（脳神経外科）講師
 平成28年4月 香川大学自然生命科学系（脳神経外科学）准教授
 令和2年4月 香川大学医学部附属病院脳神経外科 診療科長
 令和3年4月 香川大学自然生命科学系（脳神経外科学）教授



教授就任にあたって

～学生の心を鷲掴みする医学教育を目指して～



香川大学医学部 医学教育学講座

教授 ^{よこひら}横平 ^{まさなお}政直（平成11年卒・14期生）

讃樹會会員の先生方には益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。このたび、令和3年4月1日付けで、医学教育学講座担当教授を拝命いたしました横平政直と申します。

私は、広島市で生まれ育ち、1993年に香川医科大学医学部医学科に入学いたしました。1999年に卒業し、本学の第一外科学（現、消化器外科学および心血管外科学、卒後臨床研修制度導入前）に入局しました。入局にあたっては、学生であった6年生の夏、5年次の臨床実習で大変お世話になり、大きな感銘を受けた第一外科学の岡田節雄先生を頼り、一大決心で入局表明しました。入局後は1年間の大学での消化器・心血管外科の研修の後、2000年から坂出市立病院に赴任しました。ここでも岡田節雄先生、森誠治先生、近藤昭宏先生の3人の指導医の先生のもと、消化器外科を中心とした広範な診療を学びました。3人の指導医の全員が非常に優れた医師であり、とても恵まれた環境で研修を行うことができました。医療技術の向上のみならず、

患者さんに対する診療姿勢のあり方や倫理観を形成する重要な研鑽となりました。私が今でも臨床診療業務を継続できている礎となっています。

2003年からは大学院生として腫瘍病理学の門を叩きました。研究および病理診断の研鑽を重ね、現在に至っています。腫瘍病理学では、医学的興味から研究成果を確実に得られるような実験デザインを作成し、その実験結果を学会発表や論文に仕上げる楽しさを学びました。アメリカ、ネブラスカ大学メディカルセンターでの研究留学によって、世界はすぐ隣にあるということを知り、常にグローバルを意識した研究活動を行うことができるようになりました。学生時代、実は私は病理学に対して苦手意識を持っていたのですが、卒後に腫瘍病理学で臨床外科病理診断を学び、その醍醐味に目覚めた経緯があります。大きな壁を感じていた分野も指導医の技量によって大きな興味をもって取り組めるようになる衝撃を受けました。それ故、病理学が苦手な学生さんと病理組織の面白さを共感できた

時にはとても嬉しく、病理学教育のやりがいを感じてきました。

近年では、香川大学の全学共通教育改革についての取り組みに参画してきました。大学全体を視野に入れた学生教育改革にも携わり、他学部の教員と真剣に香川大学の教育の将来を議論し、1つの新しい教育プログラムを作り上げ提供する醍醐味を味わってきました(たびたび会議室から飛び出して居酒屋で延長戦を楽しんでいました)。

このように、私のこれまでの経験は雑多であり、時には「専門性の追求という意味では大丈夫なのか?」と感じたこともあります。しかし、今となっては、このような多角的な仕事にいずれも全力で取り組んだ経験は、医学教育学に携わる身には重要な過程であったと感じております。

本学の医学教育学は2010年に岡田宏基前教授が就任され設立されました。11年と浅い歴史ながら、本学の医学教育学の発展はめざましく、業務は多岐にわたります。医学教育学における、根幹となる私の究極的使命は「学生の愛校心を育み、1人でも多くの卒業生が本学に残って医師として活躍すること」です。より良いカリキュラムづくりに常に取り組みながら、学生を信じ続ける医学教育を提供することが重要と考えております。広島市出身の私ですが、学生時代の臨床実習で大きな影響を与えていただいた恩師に惹かれて、本学での入局を決め、その後も数多くの恩師のもと、本学で育てていただきました。この先は私自身が本学の学生・若手医師の心を動かせる存在になることを目標としております。

着任してすでに数週間が経過していますが、前任の岡田宏基先生が作り上げられた医学教育学講座スタッ

フのチームワークの良さに感激しております。着任直後から、講座には様々な問題が降りかかり、時にはピンチと言える状況もありました。それらの困難に対して、スタッフ皆で苦労を分かち合い、協力して乗り越えることができています。この「和」をもってすれば、本学が誇れるような医学教育を提供できるものと力強く感じております。実は、この「和」の大切さはこれまでの腫瘍病理学で学んだ、私にとっての大きな成果です。今後もこの「和」を大切に育んでいき、日々楽しく仕事をしながら、必要な場面では傑出したパフォーマンスを発揮できる講座になればと考えています。一方で、医学教育学講座は非常に多くの提供科目を抱えており、それらの科目は一般病院・医療関連施設や学外・学内の多数の先生方の多大な協力により成り立っています。支えて頂く先生方のご厚情なくして本学の医学教育を遂行することは困難です。今後とも同窓会員の先生をはじめ、多くの先生方のご支援・ご指導を賜ることができれば幸いです。

略歴

平成11年3月	香川医科大学医学部卒業
平成11年5月	香川医科大学医学部附属病院第一外科 医員(研修医)
平成12年4月	総合病院坂出市立病院 外科医員
平成17年1月	香川大学医学部腫瘍病理学 助手
平成18年3月	香川大学医学部大学院医学系研究科博士課程修了
平成21年5月	米国ネブラスカ大学メディカルセンター 病理微生物学 Research Associate
平成22年8月	香川大学医学部腫瘍病理学 助教(学内講師)
平成26年7月	香川大学自然生命科学系腫瘍病理学 准教授
令和3年4月	香川大学医学部医学教育学講座 教授



教授就任にあたって

～臨床と基礎を結ぶ研究を目指して～



麻布大学生命・環境科学部
臨床検査技術学科 衛生学研究室

教授 ^{まつした}松下 (石津) ^{のぶこ}暢子 (平成5年卒・8期生)

令和3年(2021年)4月1日付で麻布大学生命・環境科学部 臨床検査技術学科 衛生学研究室教授を拝命いたしました松下(石津)暢子です。香川大学医学部医学科同窓会報誌上で就任のご挨拶をさせていただく機会をいただきまして大変光栄に存じます。

私は昭和62年に香川大学医学部(旧、香川医科大学)に8期生として入学後、平成5年に卒業し、秦維郎教授の形成外科に入局しました。小栗顕二教授の麻酔科で研修をさせていただき、形成外科では秦教授の専門である唇顎口蓋裂、小耳症の手術のほか、耳鼻科とともに行う上顎癌後の再建手術と多岐にわたる疾患に携わりました。しかしながら、日々の臨床の現場で基礎知識の不足を痛感して、翌年に大学院に入学しました。大学院入学後も簡単な手術を少しずつ始めておりましたが、平成7年より夫がアメリカに留学することになり、New Yorkに行き2年間休学しました。New Yorkでは形成外科を開業されていた鷺尾寛先生のクリニックで手術見学などさせていただいておりましたが、鷺尾先生の紹介でコロンビア大学医学部形成外科のProf. David Chiuを紹介していただき思いがけずResearch Fellowとしてコロンビア大学に通うことができ、形成外科の研究室で実験を行なうとともに、Microsurgeryなどの手術見学を行っていました。鷺尾先生は温厚で優しい方でコロンビア大学に通い始めたのちも、ご夫妻でマンハッタンの名店にそして先生の郊外の別荘にと連れて行っていただき、アメリカの広大な自然に癒されました。

帰国後は、臨床に戻りましたが、同時に大学院の研究も開始しました。形成外科だけではなく基礎研究を行うことになり、当時Galectin-9 (Ecalectin)を同定されたばかりだった免疫病理学講座平島光臣先生のもとで、内分泌学講座(当時)の中村隆範教授、西望先生にご指導いただきながら実験を始めました。ご迷惑ばかりをかけていましたが、生化学実験の基本から先生方に教えていただき心より感謝しております。基礎研究の楽しみにふれ、またGalectin familyの研究領域も始まったばかりで日々発展しており、毎日が大変楽しかったです。論文が無事に受理された時はほっとす

ると同時にもう少し基礎研究を続けることができたかと思っていました。

幸い新しい講座を立ち上げたばかりの、川崎医科大学医学部の高田穰教授に助手として雇っていただくことになり、スタッフとして基礎研究を行うことになりました。川崎医科大学では、小児の遺伝性疾患であるファンconi貧血の原因遺伝子の解析を行ないました。当時は次々と原因遺伝子が同定されており、研究室からもファンconi貧血発症の原因がDNA損傷修復機能異常によるものであることを示す重要な論文が数多く出版されており、その一端を担うことができたことには感謝しかありません。しかしながら学生とは違い、結果が求められるだけではなく研究資金も自分で獲得しなければならない状況の厳しさも身にしみました。さらに夫の転勤で東京に家族で移動することになり、新たな職を探すことになり、東京薬科大学生命科学部の柳茂教授が研究室を立ち上げたばかりのところで講師として参加させていただくことになりました。

東京薬科大学生命科学部に勤務することになり、さらに深く基礎研究に従事することになりました。学部の4年生が卒業論文研究で研究室に所属し、卒業生の6割が修士の大学院にいくなかで基礎研究を行うことができる非常に恵まれた環境でした。東京薬科大では川崎医科大学より引き続いてDNA損傷修復機能の解析について研究を続けておりましたが、今年4月から麻布大学生命・環境科学部 臨床検査技術学科 衛生学研究室に教授として異動しました。

麻布大学は1890年に創設され、2025年には135周年を迎える大学です。獣医学部に歴史がありますが臨床検査学科も歴史が長く、卒業生の先生方も多くおられます。大学は神奈川県にありますが、緑も多く広い敷地の自由な雰囲気のある大学です。また、香川大学医学部の先輩である岩橋和彦先生が生理学研究室の教授をされておられ、不慣れな中にご指導をいただき感謝しております。今後は臨床と基礎をつなぐような研究ができるように新しい場所で研究と教育の両面から取り組んでいけたらと思っております。香川大学医学部そして讃樹会の皆様とも、学会や同窓会などで機会があり

ましたら、是非お話しできればと思います。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成5年3月 香川医科大学医学部医学科卒業
 平成5年5月 香川医科大学医学部附属病院研修医(形成外科)
 平成6年4月 香川医科大学医学部大学院医学系研究科入学
 平成12年3月 同上 修了、博士号取得
 平成12年4月 香川医科大学医学部附属病院医員(形成外科)
 平成12年10月 川崎医科大学医学部助手(免疫学講座)
 平成18年9月 東京薬科大学生命科学部講師
 (分子生化学研究室)
 平成23年10月 東京薬科大学生命科学部准教授
 (分子生化学研究室)
 令和3年4月 麻布大学生命・環境科学部教授
 (衛生学研究室)



教授就任にあたって

～臨床につながる教育及び研究を目指して～



川崎医科大学 生理学2教室

教授 なかむら 中村 たけひろ 丈洋 (平成7年卒・10期生)

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和3年5月1日付けで川崎医科大学生理学2教室主任教授を拝命いたしました。まずは、ご指導を賜りました同窓会会員の皆様に、御礼申し上げます。また香川県立保健医療大学及び香川大学在職中は公私にわたり格別のご厚情を賜り心より感謝申し上げます。私は平成28年香川県立保健医療大学赴任の際にも、本会報第52号に寄稿させていただきました。このような機会が再び訪れるとは思ってもいませんでしたので、大変光栄に思っております。

私は、平成元年3月に法政大学工学部土木工学科を卒業し、同年4月より香川医科大学に入学いたしました。それ以降現在まで、米国留学以外は香川在住で過ごしております。医学部卒業後は、同大学の脳神経外科に入局そして同時に大学院に進学し、臨床と研究を開始いたしました。この時の研究指導教員は、私の前任になります前生理学2教室主任教授の宮本修先生(平成元年卒・第4期生)でした。それから約四半世紀後に川崎医科大学で教授のバトンを受け継ぐことになり、感慨深いものがあります。その後、平成14年に米国に留学する機会をいただきました。この留学で、

臨床に基づく研究を数多く経験することができました。帰国後、臨床では脳神経外科及び救急での診療を行い、一方研究では留学での経験を基に教室員の学位研究のサポートなどを行って参りました。平成18年より基礎医学教室の教員となり、教育と研究に専念することになりました。「自分には臨床につながる教育及び研究が求められている」と実感しました。平成28年に香川県立保健医療大学に異動となり、令和3年5月川崎医科大学への赴任に至っております。

川崎医科大学は、私学ですので建学の理念に基づく人材育成を行っております。そのため教育を大変重要視しております。川崎医科大学の基礎医学教育は、様々な工夫がなされており、横断教育として解剖学と生理学を融合させ「人体の構造と機能」として臓器別に授業を展開しております。さらに臨床と基礎の縦断教育も実施されております。私もこれまで香川大学及び香川県立保健医療大学在籍時代に、効果的な教育のためのアクティブ・ラーニングの開発や導入などを行っており、この経験をぜひ現職でも活かされるよう努力して参りたいと思っております。研究に関しては、私が留学で経験した臨床に基づく研究を発展させた生理学研究を目指して参ります。また学生の視線に合わ

せて、研究の重要性や意義を示せるような研究環境を目指したいと思っております。そのためには、臨床につながる魅力ある研究の実践が必要になります。研究も教育も臨床につながるものでなくてはならないという、川崎医科大学の理念に通じるものがあります。私が以前実感した「自分には臨床につながる教育及び研究が求められている」を再度認識いたしました。

私と同窓会とのかかわりですが、平成18年度から23年度まで同窓会学年理事として様々な審議に携わってきました。平成24年度から27年度まで同窓会執行部広報局長として会報発行などを担当して参りました。この間、会員の皆様方に支えられて、務め上げることができたと実感しております。改めて感謝申し上げます。今後も可能な限り同窓会のお手伝いをして参りたいと存じます。

以上のように、会員の皆様をはじめ、多くの方々のご支援により、今の自分があると思っております。非才の身ではございますが、専心職務に精進いたす決意でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、会員の皆様のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

略歴

平成元年3月	法政大学工学部土木工学科卒業
平成7年3月	香川医科大学医学部医学科卒業
平成11年3月	香川医科大学大学院医学研究科修了
平成11年4月	JA香川県厚生連滝宮総合病院医員 (脳神経外科)
平成12年4月	香川医科大学医学部附属病院医員 (脳神経外科)
平成14年10月	University of Michigan Medical Center (research fellow)
平成17年8月	香川大学医学部附属病院医員 (救命救急センター)
平成18年10月	香川大学医学部助手(脳神経生物学)
平成21年7月	香川大学医学部准教授(脳神経生物学)
平成28年4月	香川県立保健医療大学教授(臨床検査学科)
平成30年4月	香川県立保健医療大学大学院臨床検査学専攻 専攻長
令和3年5月	川崎医科大学主任教授(生理学2教室)



教授就任にあたって

「感謝」

日本大学医学部 生体構造医学分野

教授 ^{ひらい}平井 ^{しゅういち}宗一 (平成14年卒・17期生)

香川大学医学部同窓会讃樹會の先生方には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。私、平井宗一(平成14年卒)は、令和3年4月1日付けで、日本大学医学部、機能形態学系、生体構造医学分野主任教授を拝命いたしました。ここに謹んでご報告申し上げます。

本原稿を書くにあたり、香川医科大学(現香川大学医学部)に入学してから現在までを振り返ってみました。そこで改めて、私が多くの香川大学医学部の同窓生にお世話になってきたことを実感致しました。

私は、大学時代、ラグビー部に所属しました。大学生活の多くの部分をラグビー部の仲間と過ごしました。先輩方だけでなく、OBの方々や同期、後輩の皆様にも大変お世話になりました。かけがえのない時を一緒に過ごしてくれた仲間へ心より感謝しております。また、

教授就任時には、先輩である井上成亮先生からお祝いのお花と激励の電話を頂きました。OB会に参加できていないことをこの場を借りてお詫び申し上げます。

6年生のときに、呼吸器・乳腺内分泌外科の横見瀬裕保先生にアメリカまで連れて行って頂きました。肺移植手術を見学した経験は、その後の研究に繋がっております。今でも時々、横見瀬先生の熱いお話を拝聴し、奮起させて頂いております。

卒業後は、麻酔・救急医学講座に入局致しました。前川信博先生に指導して頂き、物事の考え方などを勉強させて頂いた経験は、今でも私の糧となっております。また、同期に大変恵まれました。先日、上北郁男先生がわざわざ大学まで来て下さいました。外科の研修時には、高橋英幸先生にも大変お世話になりました。

さらに、Harvard大学へ留学したきっかけとなった、研修医時代に指導して頂いた蔵谷紀文先生にも大変感謝しております。大学院時代は、冨田修平先生に大変厳しくご指導頂きました。また、小野純一郎先生のサポートには心より感謝しております。

基礎医学、解剖学の道へ導いて下さいました伊藤正裕先生には、筆舌に尽くしがたい感謝をしております。現在も、公私ともに多くのことを学ばせて頂いております。香川大学の解剖には、竹内義喜先生、伊藤正裕先生をはじめとして、三木崇範先生、福井義浩先生という偉大な先人がおり、常に私の道標となっております。

研究を遂行する過程で、松下正之先生に大変お世話になりました。大きな道筋の立て方など多くのことを学びました。Harvard大学留学中には、同窓生の立石健祐先生と同じアパートになりました。異国の地にて活躍する同窓生から刺激を頂きました。

東京で働いていた救急病院では、高橋幸道先生にいつも助けて頂きました。また、讃樹會関東支部会会長でありました伊藤理先生にも大変お世話になりました。

愛知医科大学に在籍中には、藤原敦史先生が1年間、一緒に楽しく仕事をして下さいました。また、セミナーにて西山成先生にお会いし、活発に研究活動をされているのを見て、多くの刺激を頂きました。

大学時代、同じ班で肉眼解剖した田結庄彩知先生には、その後も様々な場面でお世話になっております。また、同期卒業の林省吾先生には、解剖学のキャリアの上で多大な影響を受けました。そして、何よりも強く影響を受けたのは、同期の内藤宗和先生でした。楽しい時も苦しい時も一緒に研究をしてこれたことが、現在の私に繋がっています。



卒業後も、内藤宗和先生だけではなく、同期の木村浩朗先生、谷丈二先生、垂水晋太郎先生と各地で集合しています。この歳になって、大学時代に多く時間を過ごした仲間に出会えることは大変幸せなことであります。写真は、木村浩朗先生から教授就任祝いとして頂いた達磨であります。

私のキャリアの様々な場面で、ここには書ききれない多くの同窓生にお世話になりました。この場で御礼申し上げます。これまで香川大学医学部から受けた御恩を忘れず、今後も同窓生との関わりを大切に、少しでも同窓会の皆様の発展に貢献できたら幸いです。今後も、皆様方からのご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。

略歴

平成14年3月	香川医科大学 医学部 医学科 卒業
平成14年3月	香川大学医学部附属病院 麻酔・救急医学講座 研修医として勤務
平成15年1月	香川大学医学部附属病院 麻酔・救急医学講座 研修医として勤務
平成15年4月	兵庫県立淡路病院 外科 研修医として勤務
平成15年10月	香川大学医学部附属病院 救命救急センター 研修医として勤務
平成16年4月	香川大学大学院医学研究科(博士課程)分子情報制御医学専攻 入学
平成20年4月	東京医科大学 人体構造学分野 助教として勤務
平成24年5月	東京医科大学 人体構造学分野 講師として勤務
平成25年9月	Massachusetts General Hospital, Harvard Medical School, Research Fellowとして留学
平成27年12月	東京医科大学 人体構造学分野 准教授として勤務
平成28年9月	愛知医科大学 解剖学講座 教授(特任)として勤務
令和3年4月	日本大学 医学部 生体構造医学分野 教授として勤務

教授就任にあたって

～うどん県からおそばの国へ～



島根大学医学部病理学講座器官病理学 教授
同大学医学部附属病院病理診断科科长・病理部部长

教授 ^{かどた きゅういち} 門田 球一 (平成15年卒・18期生)

讃樹會の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。わたくしことこのたび、2021年4月1日付けで、島根大学医学部病理学講座器官病理学教授（同大学医学部附属病院病理診断科 科長・病理部 部長）に着任しました。香川大学医学部医学科同窓会会報において、教授就任のご挨拶をする機会を頂戴し、大変ありがたく存じます。

私は愛媛県の出身で、2003年に香川医科大学を卒業し、卒後は病理学の道に進み、香川大学医学部附属病院や関連施設で病理診断の研鑽を積んできました。香川大学大学院医学系研究科の期間には、肺癌組織におけるリンパ管新生の生物学的意義に関する臨床病理学的な研究やアデノウイルスベクターを用いた遺伝子治療に関する基礎研究を行い、研究活動の基盤を築くことができました。博士号を取得後も、腫瘍の組織形態や腫瘍マーカーに基づき悪性度を解明するため臨床病理学的な研究を行ってきました。2009～2015年には、Memorial Sloan Kettering Cancer Center（ニューヨーク市）に留学し、肺癌を対象とする研究に専念でき、国際的な呼吸器病理医のネットワークの中で充実した仕事をすることができました。2015年に帰国し、再び香川大学医学部附属病院で病理診断業務に従事するとともに、病理医を目指す後進の育成に努め、臨床業務と平行して臨床に還元される病理学的研究を目標としてきました。

島根大学への着任は2020年の年度末に決まり、4月の着任から現在に至るまで、大変慌ただしい日々を過ごしております。自らが決意したこととはいえ、出身大学を離れて他大学に移動することに、こころの葛藤やさみしさもありましたが、現在も香川大学大学院医学系研究科に在籍中の大学院生への指導を継続しており、今後も香川大学と研究上でさらなる連携がとれることを楽しみにしています。また、うどん県の香川県から、出雲そばの島根県に転勤して、そばのおいしさを認識しています。しかし、自身が思っていた以上に、

身体はうどん中毒になっていたようで、週末は無性にうどんが食べたくなっています。

島根大学医学部病理学講座（同附属病院病理診断科・病理部）には、出雲圏域の症例に加えて、県内の多数の病院から病理検体が提出されており、稀な疾患を含めて多様な病理検体を経験することができます。島根県立中央病院、松江赤十字病院、松江市立病院、浜田医療センター、益田赤十字病院といった県内の基幹病院が連携施設となっており、個々の病院の病理部門と診療や病理専門研修における連携がとられています。現在、島根県・島根大学医学部病理専門研修プログラムでは、3名の後期研修医が研修中ですが、いずれも非常に優秀な先生たちであり、今後、専門医となって大きく活躍してくれるものと、着任早々嬉しく思っています。

みなさまご存じのこととは存じますが、病理部の業務としては、病変の一部を採取する生検や摘出検体を対象とする組織診断、粘膜などから擦過し採取された細胞や剥離細胞を対象とする細胞診断、不幸にして亡くなられた患者さんの死因を究明するための病理解剖が含まれます。近年では、患者さんごとに最適な治療法を提供するために、コンパニオン診断やがん遺伝子パネル検査が発展し、病理検体の取り扱いを含めて病理部門の役割や臨床部門との連携がさらに重要となっています。しかし、地方では人口あたりの病理専門医数は極めて少なく、将来的な病理診断体制の維持には厳しい現状があり、島根県も例外ではありません。島根大学医学部の病理部門においては、正確で精密な病理診断を継続するとともに、学生や研修医に病理診断の魅力を伝え、病理医をリクルートし、県内外で活躍できる病理医を育成したいと考えております。若輩ものではございますが、全国の八百万（やおよろず）の神々がお集まりになる出雲の国で、誠心誠意、努力して参ります。今後も、讃樹會の皆様のご指導を賜りますように何卒お願い申し上げます。

略歴

2003年 3月 香川医科大学医学部医学科 卒業
2003年 4月 香川医科大学医学部附属病院 研修医
2005年 4月 香川大学医学部附属病院 医員
2006年 4月 香川大学医学部附属病院 助手
2007年 4月 香川大学医学部附属病院 助教
2009年 3月 香川大学大学院医学系研究科 修了
2009年10月 Memorial Sloan Kettering Cancer Center (MSKCC),
NY, USA. Research Fellow
2012年10月 MSKCC, NY, USA. Research Scholar
2013年10月 MSKCC, NY, USA. Senior Research Scientist
2015年 4月 香川大学医学部附属病院 助教
2018年 6月 香川大学医学部附属病院 学内講師
2019年 4月 香川大学医学部附属病院 病理診断科 副科長
・病理部 副部長
香川大学自然生命科学系 講師
2021年 4月 島根大学医学部病理学講座器官病理学 教授
島根大学医学部附属病院病理診断科 科長
・病理部 部長



退任挨拶

副学長(医療担当)・附属病院長退任挨拶



香川大学副学長(医療担当)
香川大学医学部附属病院長

田宮 隆

「讃樹會」会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび2021年9月30日をもって香川大学副学長(医療担当)・香川大学医学部附属病院長を退任することになり、一言ご挨拶を申し上げます。

私は2003年4月に香川医科大学脳神経外科に助教授として岡山大学脳神経外科から異動し、2007年7月から香川大学脳神経外科学講座教授に就任、2021年3月31日に教授を退任、そしてこの度、病院長としての任期も終了することとなりました。約18年半にわたり、多くの「讃樹會」会員の皆様にお世話になり誠に有難うございました。心より御礼を申し上げます。

脳神経外科学講座は、初代大本堯史名誉教授、2代目長尾省吾名誉教授(前学長)が発展させてきた素晴らしい教室であり、臨床において「患者さま中心の良質かつ最新の低侵襲な脳・脊髄・末梢神経の治療」のキャッチフレーズで、脳神経外科領域で扱う幅広い診療を他科とも連携して行ってきました。研究においては、悪性脳腫瘍に対する薬剤耐性遺伝子の研究、PETによる脳腫瘍や脳血管障害に対する最新診断、脳血管障害や頭部外傷における脳浮腫の研究などを他講座と協力して行ってきました。教育においても、人としての優れた倫理観を持つ優秀な医療人の育成を目標とし、23名の入局、16名の日本脳神経外科学会専門医取得、11名の医学博士取得など順調に発展してきました。さらに退任するにあたり、「讃樹會」会員の三宅啓介先生にバトンタッチすることができ本当に嬉しく思っております。「讃樹會」会員の皆様におかれましては、三宅啓介教授をはじめ当科スタッフの先生方に対し、さらなるご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

最後の2年間は、病院長も併任させて頂きました。病院再開発が終わりハードのみならずソフトの面での飛躍が必要な時期に、新型コロナウイルス感染症という大きな災害が襲ってきました。当院としても、医療

器材の供給不足などがあり、一時期は非常に病院運営に影響を受けましたが、今後も県内唯一の特定機能病院として高度な医療の提供を継続しながら、香川県、および県内の医療機関と連携して新型コロナウイルス感染症に対応していきたいと考えています。本院は都道府県がん診療連携拠点病院、がんゲノム医療拠点病院、香川県災害拠点病院、エイズ治療中核拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、認知症疾患医療センター、難病診療連携拠点病院などの指定を受けていますが、さらに今年度から香川県アレルギー疾患医療拠点病院に選定されました。「患者安全」の考えに基づいた診療を行うために医療安全管理部、感染制御部などの充実、地域医療との連携を図るために総合地域医療連携センター、重症救急患者治療を中心とした救命救急センター、糖尿病克服プロジェクト“チーム香川”による糖尿病センター、総合周産期母子医療センター、高難度医療を行うために心臓血管センター、脳卒中診療部、ロボット手術センター、臓器組織提供・移植医療支援室、次世代につながる臨床研究や先進医療の開発を支援・育成する先端医療開発センターや臨床研究支援センター、臨床遺伝ゲノム診療科の新設、人材育成のために臨床教育研修支援部の下に卒後臨床研修センター、地域医療教育支援センター、医師キャリア支援センター、特定行為研修センター、感染症教育センターなどの病院機能の強化を行ってきました。さらに放射線治療棟の新設及び香川県のドクターヘリ導入による給油施設整備が行われる予定です。このようにさらなる発展をとげ香川県民に愛され信頼される素晴らしい香川大学医学部附属病院であり続けることを心より祈念しております。

最後に私を支えて戴いた「讃樹會」会員の皆様、医学部、附属病院の先生方、職員の方々、そして医学部硬式庭球部の関係の方々へ心より感謝申し上げますと共に、讃樹會の益々の発展を心よりお祈り申し上げます。

教授退任のご挨拶と現役続行のお知らせ

兵庫県立淡路医療センター 病院長
鈴木 康之

定年退職まで2年を残し、本年3月末日をもって消化器外科学教授を退任いたしました。平成18年6月1日付で香川大学に着任しましたので、約15年間お世話になりました。香川大学には以前、神戸大学外科学専門の故細見弘教授が生理学講座を主宰され、私の同級生も含め何人もが研究指導いただいたこともあり、赴任前から親しみを感じておりました。とはいえ他学への赴任にあたっては不安も大きかったことを思い出します。診療・研究・教室運営などに不安もある中、希望と情熱をもって着任しましたが、今から思えば勇み足や空回りも多く、教室としてまとめ、落ち着いて仕事ができるようになるまで5年ほど費やしたように思います。当初「もっとスマートに新体制をスタートできる」と思っていたのですが、自らの経験不足・実力不足が故にエネルギーと時間を費やしたと思います。当時は、結果は出ずとも「継続は力なり」「Slow but Steady」と自分に言い聞かせて歩んでいました。

そんな中、私が幸運であったのは、教室員・同門会（讃刀会）はもとより、讃樹會の皆様、そして他の講座の教授やスタッフの先生方も総じて協力的で、常に温かい支援を送っていただけたことです。消化器外科は旧第一外科が心臓血管外科と分離してできた教室でしたが、この二つの講座・診療科は今も変わらず家族のような関係ですし、呼吸器外科からは外科の兄貴分のように温かくご指導いただきました。消化器内科とは学術・診療の両面で最高のパートナーになりました。腫瘍内科の新設も消化器癌の診療レベルをぐっと上げていただきました。他にも診療で関係の深い麻酔科、泌尿器科、産婦人科、放射線科、救命救急(以上通称)、全ての内科、手術部・・・、研究指導や協力をいただいた基礎講座、医師キャリア支援センターや臨床研究支援センター・・・、全て書ききれませんが、皆様には改めて厚くお礼申し上げます。温かい大学であったと感謝しています。

赴任後年数が経ち、手術症例数の増加とともに大規模手術・低侵襲手術も着実に増え、臓器別診療体制も

機能し始め、肝煎でもあった脳死臓器移植もスタートでき、その後も継続できています。研究テーマも「膵癌術前治療・集学的治療」「がん遺伝子の臨床病理学的検討」「新規手術法の開発」など“柱”になるものもできました。近年ではいくつかの多施設共同臨床研究を主導し、これらの成果も世界に情報発信しています。また、施設としては肝胆膵高度技能専門医修練のA施設、中でも膵癌では全国的なHigh-volume centerになりました。若者が敬遠する多忙な外科ですが、この10年で30名の入局があったことも地方大学の教室としては恵まれていました。振り返れば良いことばかり思い出します。もちろん残念なことや苦しいことも沢山ありましたが、ほぼ忘れまして(笑)。

一昨年に高松で開催した第31回日本肝胆膵外科学会は在任期間で唯一の全国学会でした。本学会開催にあたり準備などで教室員はかなり消耗したと思いますが、成功裏に終えた事は教室員にとって大きな自信になったと思っています。複数の全国学会や国際学会を主催する実力や体力はなかったですが、これで必要十分と思っています。

私は病院の管理・運営に専念すべき年齢に達しているかもしれませんが、まだ現役の外科医として診療と、できれば研究・教育もしばらく頑張りたいと思っています。体力はまだ大丈夫なはず(頭は・・・?)。兵庫県立淡路医療センターは今後5年間それが叶う異動先と考え、また家族の勧めもあり今回の早期退職を決めました。同センターは地域性から、香川大学と今後の専門研修での連携や診療協力などが十分可能と思っています。着任して1か月余り新型コロナウイルス感染症の対応で多忙を極めていますが、落ち着きましたら連携・協力のご相談に乗っていただけると幸いです。

最後になりますが、教授会を構成する若く優秀な先生方を中心に、讃樹會の先生方には香川大学のさらなる発展をどうかよろしく願いいたします。私も陰ながら応援できればと思います。長い間どうも有り難うございました。

医学教育講座定年退官に際して



宇多津病院心療内科
岡田 宏基

讃樹會の皆様には11年間の在籍中様々な面でお世話になりました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

私は平成22年4月に就任しましたが、その直前の医師国家試験で、香川大学医学部の学生が全国4位だったか、かなりの好成績を取めたのです。これは大変素晴らしいことであると共に、これが続くわけではなく困ったことになったと思っていました。案の定、翌年は半分以下の順位に急降下しました。しかし、災い転じて福となす、の言葉通り、この結果はその後の教育改革を後押ししてくれました。

国家試験の成績低迷については、讃樹會の皆様にもご心配をおかけし、当時の教育スタッフと讃樹會の代表の方々との懇談会を催して頂きました。そこでいくつもの貴重なご意見を頂いたのですが、その中でも医学実習Iの終了時に知識を問う試験をしてはどうかと提案頂き、これは総合試験としてすぐに実行に移し、現在まで継続しております。

教育プログラム（カリキュラム）で当時問題になっていたのは、学士編入が2年次の後期からになっていたため、解剖学の講義・実習が2年から3年に渡らざるを得ないということでした。さらにちょうどこの頃、アメリカで診療をするための資格試験であるECFMGからの医学教育の国際認証についての勧告があり、それに関連して、臨床実習72週という目安ができました。当時香川大学医学部では54週であったため、これを大幅に増やす改訂を行なう必要がありました。これらを満たすプログラム作成のため、まず学士編入を2年次前期から移行させ、基礎医学をできるだけ前倒しし、統合講義を整理・短縮し、4年次1月から臨床実習に入り、1年間各科をローテーションし、5年次1月から27週の選択実習を行い、計69週の臨床実習を確保するというプログラムを構築し、平成26年度の入学生から適応しました。

就任後3年間は住谷教務職員と2人で講座の運営を行っていましたが、医学教育学講座の存在意義が少しずつ認識され、医療管理学講座の准教授が空席になるタイミングで、このポストを医学教育学講座の准教授に振り分けていただくことができました。公募を行った所、当時奈良県立医大小児科の講師であり、岐阜大

学医学部医学教育センターの大学院生でもあった西屋克己先生が応募して下さり、これほど適任な方はないと考え平成25年4月に准教授として就任していただきました。

新たに開設した講義科目としては、3年次の「症候論」と、医学実習Iと並行して行う「医療管理学・診断学」があります。前者は臨床医学講義である統合講義総論の後に配置しました。これは、20の代表的症候を20の学生グループに担当させ、学生に講義資料を作成させ、講義も行わせるようにしました。講義の質を保証するために臨床医学系の教員に講義資料の事前チェックと当日の司会をお願いしました。「医療管理学・診断学」のうち、医療管理学は、医療管理学の准教授を医学教育学の准教授に配置換えしていただいたことからその講義も引き継いだ形になりました。医療安全などは他の講義でも学ぶ機会があるので、ここでは診断学を主として行って来ました。私の担当する診断学は、10数人の学生を回答グループとして、彼らと対話しながら臨床推論を進めて行く形式にしています。講義のレポートでは、始め頃は病名がさっぱりわからないと書いていたのが、9回シリーズの終わり頃になると、推論の仕方がわかるようになってきたという記述もあり、学生達の進歩が窺えることが毎年楽しみです。

在任中に対応した大きな仕事として、「医学教育分野別評価」の受審が挙げられます。上述したECFMGの通告を受けて、「日本医学教育評価機構（JACME）」が設立され、世界基準に則った評価を請け負うことになりました。香川大学医学部では平成27年秋に、当時医学部長の今井田克己先生の主導でワーキンググループが設置され、岡田が取り纏めを行いました。評価基準は9つの領域があり、それぞれに教授会構成員をリーダーと担当者に配置しました。これらのWGメンバーの方々に担当領域の報告書を執筆していただきましたが、評価基準がWFME（World Federation for Medical Education）の翻訳であったため、理解しづらい箇所も多く、また医学教育文化の差もあり、非常に書きにくい（何を書いていいかわからない）箇所も多々ありました。しかしながら、その年度末にはおおよその草案が出来上がり、その後2年間をかけてこれ

をブラッシュアップし、予定通り平成30年10月末から11月始めにかけて現地調査が行われました。最終結果は、基本的水準36項目のうち24項目が適合で、12項目が部分的適合、質的向上のための水準では22項目が適合、13項目が部分的適合という結果でした。これは他大学と比較しても遜色ない結果でしたが、領域2の教育プログラムで非常に多くの改善事項の指摘があったため、さっそく翌年から教育プログラムの改訂に取り組むことになりました。

この間に衝撃的な出来事がありました。平成28年の夏も終わりの頃、西屋准教授から、関西医科大学の教育センター長へのお誘いが来ているとお話でした。大阪は西屋先生のご実家にも近く、またご栄転にもなるため、断腸の思いで承諾することにしました。そうなると、後任の准教授を探さないといけません。西屋先生の時には公募をしたのですが、今回は学内の方をお願いしようと思い、私の同門である血液・免疫・呼吸器内科の講師であった坂東修二先生に声をかけまし

た。坂東先生はその講義の進め方に対して学生からの評価が非常に高く、医学教育学に移っていただくには最適の人材でした。ご本人と元講座の長の承諾を得て、平成29年5月に就任していただきました。

令和2年の春以降は新型コロナウイルスによる対面講義の制限に伴って、それまで稼働していた講義収録システムと、e-ポートフォリオであるWebClassをフル活用し、オンデマンドでの講義の視聴とWebClassでのレポート記載というシステムを構築し、何とか乗り切ってきています。これも同窓生を中心とした教員の皆様と教育センタースタッフのご理解とご協力の賜と深く感謝しています。

私の後任には幸い同窓生である横平政直先生（前腫瘍病理学准教授）が就任して下さいました。今後も同窓生の皆様にご協力していただきながら、よりよい、そして夢のある医学教育を推進して行って欲しいと願っています。

11年間お世話になり、誠にありがとうございました。

令和2年度会計報告

令和2年度収支計算報告書

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)
1. 事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,500,000	9,578,000	1,078,000
②寄付金・広告収入	800,000	850,000	50,000
③委託手数料収入	2,755,000	2,803,845	48,845
④雑収入	0	1,484	1,484
事業活動収入計	12,055,000	13,233,329	1,178,329
2. 事業活動支出			A) - B)
①事業費支出			
会報制作費	1,100,000	1,221,880	-121,880
後援協賛事業費	400,000	268,785	131,215
支部・同期会費	200,000	85,815	114,185
学術助成金事業費	1,650,000	1,625,773	24,227
国外留学助成金事業費	1,000,000	0	1,000,000
学生援助費	400,000	0	400,000
国際交流協力費	150,000	0	150,000
研修医協力費	700,000	206,618	493,382
講演会費	450,000	438,087	11,913
学会助成金事業費	160,000	160,000	0
新型コロナウイルス対策支援事業費	500,000	500,000	0
事業費支出小計	6,710,000	4,506,958	2,203,042
②管理費支出			
事務人件費	2,220,000	2,132,350	87,650
事務局・各委員会運営費	1,400,000	1,049,847	350,153
事務局設備投資費	300,000	154,000	146,000
ホームページ管理費	55,000	55,000	0
通信費	1,000,000	1,021,318	-21,318
慶弔費	200,000	189,500	10,500
雑費	100,000	92,939	7,061
香川大学同窓会連合会費	0	0	0
管理費支出小計	5,275,000	4,694,954	580,046
事業活動支出計	11,985,000	9,201,912	2,783,088
当期事業活動収支差額	70,000	4,031,417	
前期繰越収支差額	41,365,363	41,365,363	
次期繰越収支差額	41,435,363	45,396,780	

貸借対照表

令和3年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(45,396,780)	1. 固定負債	(16,000,000)
現金・預金	45,396,780	同窓会館建設引当金	16,000,000
2. 固定資産	(16,207,241)		
一括償却資産	207,241		
同窓会館建設引当預金	16,000,000	正味財産	45,604,021
合計	61,604,021	合計	61,604,021

財産目録

令和3年3月31日

単位：円

資産の部		金額
1. 流動資産		
(1) 現金・預金		
イ) 手許現金		23,032
ロ) 普通預金	百十四銀行三木支店	2,552,113
ハ) 郵便貯金	郵便振替貯金事務センター	31,543,648
ニ) 定期預金	香川銀行本店営業部	10,196,116
	百十四銀行医大前出張所	<u>1,081,871</u>
	流動資産合計	<u>45,396,780</u>
2. 固定資産		
(1) 有形固定資産一括償却資産		207,241
(2) 特定目的資産 同窓会館建設引当預金		<u>16,000,000</u>
	固定資産合計	<u>16,207,241</u>
	資産合計	<u>61,604,021</u>

固定資産の内訳

(令和3年3月31日現在)

資産の名称	数量	取得年月	取得価額	償却方法	耐用年数	償却率	当期償却額	未償却残高
事務局パソコン	2	R1.10	313,720	一括償却	3	0.333	104,573	104,574
事務局複合機	1	R2.6	154,000	一括償却	3	0.333	51,333	102,667
			467,720				155,906	207,241

監査報告書

令和2年4月30日

香川大学医学部医学科同窓会
 議事會 会長 平川 栄一郎 殿

公認会計士 岩村 浩二

私は、香川大学医学部医学科同窓会議事會の令和2年4月1日から令和3年3月31日に至る令和2年度決算報告書の監査を実施した結果、収支状況及び財政状態を適正に表示されているものと認めます。

以上

監査報告書

令和2年6月2日

香川大学医学部医学科同窓会
 議事會 会長 平川 栄一郎 殿

監査委員長

西田 智子

議事會監査委員会は、令和2年4月1日から令和3年3月31日に至る令和2年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。

以上

令和2年度の執行事業であった新型コロナ対策支援事業の詳細を報告いただいておりますのでお伝えします。

讃樹會 令和2年度の新型コロナ対策支援事業費の執行について

香川大学医学部薬理学 教授 西山 成

香川大学 医学部医学科 同窓会 讃樹會の 皆様方におかれましては平素より大変お世話になっております。この度、令和2年度の新型コロナ対策支援事業費のご支援を賜りまして、心より感謝申し上げます。以下に実施結果などを報告申し上げますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

使用目的：新型コロナ肺炎COVID-19に対するPCR検査システムを香川大学において確立するために必要なPCR測定キット購入費の補助

使用金額：島津製作所PCR測定キット、タカラバイオPCR測定キットの購入費の一部として、50万円全額を使用（不足分は薬理学研究費使用）

実績・結果：

新型コロナ肺炎陽性患者からの検体を使用し、香川大学において新型コロナ肺炎COVID-19に対する唾液を使用したPCR検査システムを確立した。本結果を持って、衛生検査所として香川大学医学部を申請し、承認を受けた。さらに、厚生労働省事業「新型コロナウイルス感染症のPCR検査等にかかる精度管理調査」にて、検査精度の基準を満たすことが証明された（2020年12月）。

2021年1月より、香川大学COVID-19 PCR測定班（班長・西山）を医学部基礎系教員有志で立ち上げ、本学の学生・教職員の希望者に対し、毎週一回以上、PCR検査を実施している。さらに、香川県の要請に応じ、県内検査検体の一部の測定を請け負っている。これらの結果の一部は、耳鼻咽喉科・星川教授が学会で発表予定である。 以上

令和3年度予算

令和3年度予算

令和3年4月1日から令和4年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

	令和3年度予算	令和2年度予算	令和2年度決算
1. 事業活動収入			
①会費・入金収入	8,500,000	8,500,000	9,578,000
②寄付金・広告収入	800,000	800,000	850,000
③委託手数料収入	2,900,000	2,755,000	2,803,845
④雑収入		0	1,484
事業活動収入計	12,200,000	12,055,000	13,233,329
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
会報制作費	1,100,000	1,100,000	1,221,880
後援協賛事業費	500,000	400,000	268,785
支部・同期会費	200,000	200,000	85,815
学術助成金事業費	1,650,000	1,650,000	1,625,773
国外留学助成金事業費		1,000,000	0
学生援助費	1,400,000	400,000	0
国際交流協力費		150,000	0
研修医協力費	700,000	700,000	206,618
講演会費	450,000	450,000	438,087
学会助成金事業費	280,000	160,000	160,000
新型コロナウイルス対策支援事業費	500,000	500,000	500,000
事業費支出小計	6,780,000	6,710,000	4,506,958
②管理費支出			
事務人件費	2,220,000	2,220,000	2,132,350
事務局・各委員会運営費	1,400,000	1,400,000	1,049,847
事務局設備投資費	0	300,000	154,000
ホームページ管理費	55,000	55,000	55,000
通信費	1,050,000	1,000,000	1,021,318
慶弔費	300,000	200,000	189,500
雑費	100,000	100,000	92,939
予備費	100,000		
管理費支出小計	5,225,000	5,275,000	4,694,954
事業活動支出計 (①+②)	12,005,000	11,985,000	9,201,912
当期事業活動収支差額	195,000	70,000	4,031,417
前期繰越収支差額	45,396,780	41,365,363	41,365,363
次期繰越収支差額	45,591,780	41,435,363	45,396,780

理事会議事録

令和3年度第1回理事会 令和3年8月5日～11日（書面審議）

新型コロナウイルス感染防止のため、対面の会議を避け書面審議となる。全理事58名に議題資料を送付し、全議題について承認のメール返信16名、委任状の提出18名、計34名の参加があった。理事の過半数（29名）以上の参加により理事会が成立した。

1. 令和2年度決算承認

決算資料として、収支計算報告書、貸借対照表、財産目録、固定資産台帳が提示された。二見・岩村会計事務所並びに理事監査委員会の監査は終了している。令和2年度に新規に執行した新型コロナウイルス対策支援事業について、担当いただいた西山成教授（薬理学）から実施結果の報告、他に事務局より令和2年度の会費納入状況分析が追加資料として提示された。令和2年度決算が承認された。

2. 令和3年度予算案審議・決定

予算は承認を得て提示通りに決定した。資料は令和3年度予算案の他に、医学部祭予算案が提示された。医学部祭実行委員会から、コロナ禍で開催を目指す医学部祭について支援の要望があり、例年通りの医学部祭寄附5万円に、新型コロナウイルス支援事業費より医学部祭のコロナ対策への支援として30万円を追加し、計35万円を支援することが決定した。

3. 令和3年度研究助成金/奨励金審査

学術局長による研究助成金/研究奨励金の選考についての説明、並びに申請者個人名を記号化した評価一覧が資料とされた。受賞者は、研究助成金が平井宗一先生（平成14年）、研究奨励金が千代大翔先生（平成22年）に決定した。

4. 学会助成金審査

2022年開催予定の以下の2件への助成が決定した。助成額は要項に則る。

- ① アジア太平洋肝臓学会（APASL）シングルトピックカンファレンス高松
『Live Cancer: Clinical and Basic Research』
（2022年9月） 助成額20万円
- ② 第7回腎移植内科学術研究会
（2022年9月） 助成額8万円

5. 学生の競争的資金審査

以下の2件へ各2万円の助成が決定した。

- ① 学生ACLS勉強会
- ② 臨床推論勉強会

6. 次年度会長選挙並びに理事選挙の日程確認

令和4年度は、会長選挙並びに理事選挙の実施年であることが告知され、総会開催日（未定）までの選挙スケジュールの概略が資料で提示された。

令和3年度 讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

速報

部 門	受賞者	研究題目
研究助成金	平井 宗一 (平成14年卒) 日本大学医学部 生体構造医学分野	代謝産物解析を用いた生体ガス分子による 高圧気相保存法の開発
研究奨励金	千代 大翔 (平成22年卒) 香川大学医学部 消化器・神経内科学	早期大腸癌に特異的なmicroRNAの同定と その機能解析

◆選考過程のご報告◆

第17回(令和3年度)讃樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門は3件、研究奨励金部門4件の全7件の申請があり、学外評価委員15名によって評価を受けました。

評価に当たって、学外評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしております。採点無しというケースを可能な限り少なくするべく、提出された申請内容に鑑み、専門に近い学外評価委員5名を選定し、具体的には学外評価委員一人につき、2～3件の採点をお願いしました。

採点は6つの項目(1. 研究課題の学術的重要性・妥当性、2. 研究計画・方法の妥当性、3. 研究課題の独創性・革新性、4. 研究課題の波及性、5. 研究の実現性、6. 研究の学術的優先度)に対して、それぞれ5段階評価(5点:極めて高い、4点:高い、3点:やや高い、2点:やや低い、1点:低い)を行って頂き、合計点を平均しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成金部門では平井宗一先生の「代謝産物解析を用いた生体ガス分子による高圧気相保存法の開発」(4.23点/5点満点)が第一位となりました。研究奨励金部門では千代大翔先生の「早期大腸癌に特異的なmicroRNAの同定とその機能解析」(3.67点/5点満点)が第一位となりました。

また、今年度の全体平均点は3.60点/5点満点でした。

学外評価を基に8月開催の令和3年度第1回理事会(書面審議)において、平井宗一先生に金壹百万円、千代大翔先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。

両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、

研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

学外評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讃樹會研究助成 学外評価委員

臨床科

	氏 名	
1	伊藤 進	香川大学 名誉教授
2	今井 裕一	愛知医科大学 名誉教授/多治見市民病院 病院長
3	千田 彰一	香川大学 名誉教授
4	成瀬 光栄	国立病院機構京都医療センター 臨床研究センター 臨床研究企画運営部 特別研究員/医療法人医仁会武田総合病院 内分泌センター長
5	原 量宏	香川大学瀬戸内圏研究センター 特任教授
6	水野 博司	順天堂大学医学部形成外科学講座 教授
7	吉栖 正生	広島大学大学院医系科学研究科心臓血管生理医学教授

基礎科

1	梶谷 文彦	川崎医科大学名誉教授/川崎医療福祉大学客員教授/岡山大学特命教授/AMED医療機器開発推進研究事業プログラムスーパーバイザー
2	小林 良二	香川大学 名誉教授
3	阪本 晴彦	香川大学 名誉教授
4	田畑 泰彦	京都大学ウイルス・再生医科学研究所 再生組織構築研究部門 生体材料学分野 教授
5	徳光 浩	岡山大学大学院自然科学研究科生命医用工学専攻細胞機能設計学 教授
6	西堀 正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻生体薬物制御学講座 薬理学分野 教授
7	藤田 守	久留米大学医学部客員教授/長崎大学医学部客員研究員/産業医科大学医学部非常勤講師客員教授
8	森田 啓之	東海学院大学健康福祉学部管理栄養学科 教授

(敬称略)

ニュースの窓

第36期生卒業式

令和3年3月24日

新型コロナウイルス感染症が全国的に広がっている現状に鑑み、香川大学卒業式・修了式は、分散したキャンパスごとに挙行されました。参加者を卒業生・修了生のみにも縮小し、教職員、保護者の隣席は控えることとなりました。

3月24日（水）10時より本学キャンパス卒業式式典のライブ配信後、11時より医学部では臨床講義棟において、式次第に沿って学部長・研究科長による告辞、学科長・専攻長・病院長からの挨拶、祝電披露、各表彰、卒業記念品贈呈が行われました。

毎年、卒業式の夜に行われる謝恩会は、昨年に続きやむなく中止となりました。同窓会からの卒業記念品であるネームペン、例年ならば謝恩会で贈呈していましたが、卒業式会場の各自の席に配置して、全員に贈ることができました。

謝恩会のイベントのひとつであるベストティーチャー賞（正式名称はOutstanding Teacher of the Year）は、毎年、6年生の投票によって決定されるものです。36期生は医学教育学准教授坂東修二先生をベストティーチャーに決定し、謝恩会実行委員長の草薙諒一郎さんが、3月9日に医学教育学の医局に坂東先生を訪れ、卒業生を代表して表彰状とトロフィーの贈呈を行いました。



臨床講義棟での卒業式

Message

第36期卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。この度はベストティーチャーに選んでいただきまして誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。医学教育を仕事にしている私にとってこれ以上嬉しい賞はありません。私の拙い講義や実習が、様々な分野でご活躍される皆様の少しでもお役に立てればと願っております。どうか香川大学医学部の卒業生であるという誇りを胸に、今後とも体に気をつけて頑張ってください。

香川大学医学部 医学教育学講座
准教授 坂東 修二



謝恩会実行委員長
草薙諒一郎さん

坂東修二先生

医学部学生が新たな皮膚疾患を医学論文で報告

令和3年7月

香川大学医学部の学生、新たな皮膚疾患を報告

香川大学医学部医学科6年生の末澤明^{メイ}さん、森昭博さんが実習で指導を受け、執筆した医学論文が、2021年7月、ともに国際医学誌に掲載されました。

末澤さんは、糖尿病治療薬のDPP-4阻害薬の内服中におこった粘膜類天疱瘡という病気を世界で初めて報告しました。この薬の内服中は、皮膚に水ぶくれができる類天疱瘡という病気がおこりやすくなります。しかしながら、病気が粘膜にも出やすくなるかどうかは知られていませんでした。糖尿病の治療中に治りにくい口内炎ができ、香川大学医学部附属病院を受診した患者さんについて、久留米大学や北海道大学との共同研究で粘膜類天疱瘡と診断、薬の中止で症状が改善されました。糖尿病の治療中に粘膜に症状が出たときには注意が必要なことを *The Journal of Dermatology* という医学誌に報告し、掲載されました。

森さんは、点状紅斑という日本独特の病気の国際的な位置づけを提案し報告しました。この病気は78年前、九州大学の樋口謙太郎教授が国内で報告して以来、「樋口の点状紅斑」と呼ばれていましたが、国際的にはほとんど知られていませんでした。これまで何年もの間診断がつかずに香川大学医学部附属病院に紹介された患者さんの症状を報告し、この病気が初めて、欧州皮膚科学アカデミーの学会誌に掲載されました。

末澤さんと森さんはともに香川県出身です。今年1月に実習で3週間皮膚科学に配属となり、今回の症例を担当して指導を受けました。指導した大日輝記皮膚科学教授は「どちらも世界の教科書に載る仕事。香川での取り組みは世界につながっていることを学生に実感してほしい」と話しています。

発表論文：

Suezawa et al. Dipeptidyl peptidase-4 inhibitor-associated mucous membrane pemphigoid. *J Dermatol* 2021. DOI: 10.1111/1346-8138.16061

Mori et al. Erythema punctatum Higuchi: reconsidering its relationship with adrenergic urticaria and eruptive pseudoangiomatosis. *J Eur Acad Dermatol Venereol* 2021. DOI: 10.1111/jdv.17474

香川大学 HP News Releaseより転載



Part3

卒業記念に思う



「1万日ぶりの再会」

香川大学医学部整形外科 准教授

加地 良雄 (平成6年卒・9期生)

この度、讃樹會様からご依頼頂き、「卒業記念に思う」という特集に寄稿することとなった。卒業記念とは石碑や卒業記念植樹などのことのようにだが、実はこの寄稿依頼を頂いて卒業後一度も自分たちの記念樹を見に行っていないことに気が付いた。卒業式の祝賀会で当時学長をされていた入野昭三先生に記念樹の目録を渡し、その時に「???の木、1本」と読み上げたことははっきりと記憶に残っている。しかし、「???」の部分が思い出せなかった。今年で卒後27年。1年は365日なので、単純計算すると9855日以上もの間、記念樹を見に行かなかったことになる。約1万日である。これまで、プラザなどに植樹されている木々を見るにつけ、「そういえば自分たちも植樹をしたよなあ」、「どこに何の木を植えたんだっけ」と思うことはあった。しかし、そのうちキャンパスのどこかで見つかるだろうと思いつつ今に至ってしまった。

今回頂いた寄稿依頼書類の中に我々が植樹した記念樹の写真が入っていた。その写真を頼りに搜索し、なんと約1万日ぶりに記念樹と再会した。記念樹は我々が入学した頃の頃、勉学に勤しんだ講義棟の西側、つまり多くの級友が講義中に後ろの扉から脱走し、屋外に出るのに使った非常階段を降りたちょうどその場所に佇んでいた。記念樹は染井吉野、つまり桜の木だった。

記念樹を見ると、植樹した時の記憶が甦るかと思っただが、実際にはほとんど何も思い出せなかった。それだけ長い月日が流れたということだろう。あろうことか記念樹よりもその背後にある先述の脱走用非常階段を見るといろんなことが思い出された。昼休みになるとこの階段を降りてランチに出掛けた。近場なら寒川うどんの「ざるや生醤油」、久米池うどんの「とりなんば」、さらには東東亭の「天津飯や焼きめし」。たまに遠出をして大窪寺の「打ち込みうどん」、びんび家の「びんび飯やタコ飯」などを食べに行った。どうし

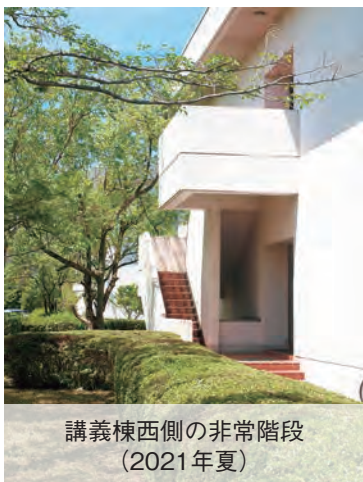


2021年春の染井吉野

て昼休みにそんな遠出ができたかは思いだせないが、午後の講義が休講になったためとか、おそらく合法的な行動だったのだろうと信じたい。いろんなものを食べるのも楽しかったが、道中でかわす友人たちとの会話がとにかく楽しかった。数年前の同窓会で旧友に再会した時、学生時代の楽しかったことがたくさん思い出されたが、この非常階段を見ると、その時ぶりにいろんなことが思い起こされた。

我々が卒業したのは平成6年。卒業後、大学で働いていた同級生も少しずつ減っていった。現在残っているのは麻酔科の浅賀先生、救命救急センターの川北先生、そして整形外科で働く私のたった3人だけである。浅賀先生とはICUなどで時々顔を会わすが、この年になると救命救急センターにまで呼び出されることはほとんどなくなり、川北先生とはめったに会わなくなった。たまに見かけると、とても懐かしく感じる。

今回せっかく再会を果たした記念樹なので、大学にいる間、同級生に代わってこの木を見守ってほしいと思う。浅賀先生や川北先生もぜひ記念樹を見つけ、一緒に見守ってやって下さい。

講義棟西側の非常階段
(2021年夏)

卒業アルバムより植樹風景

愛して三木町

たかお整形外科医院 院長
高尾 努 (平成7年卒・10期生)

君と初めて出会ったのは、入学式の時だったね
慣れない化粧の向こうに見えた瞳の輝きに
いつしか僕の声にならない想いが、この胸、しめつける。
一緒に行ったね ベルシティー
一緒に食べたね 農学の学食
一緒に歌ったね 坂下のポニータ
一緒に落ちたね 一生の再試
男井間池に映る朝日を二人でながめたね
愛して三木町 牛が住んでいるけど
僕の大好きな君がいるから
愛して三木町 かえるの声するけど
僕の愛する君がいるから
好きな町

皆さんは顔を閉じて母校に思いをはせるとき、どんなテーマソングが聞こえてきますか？これは当時の軽音の林さんが作った「愛して三木町」という、学祭などでいつも歌われてきた曲です。私の中では、ほとんど校歌のようなもので、今でも大学に行くときに、耳をすませばどこからか聞こえてくるような気がします。農学の学食は今でもあるでしょうが、ベルシティーやポニータはどうでしょうか？（一生の再試は間違いなく今でもあるでしょう！）

そこで、卒業当時はあって、今は無いものを考えてみました。まずは何といても大学の東側にあった食堂(正確にはレスト喫茶)「ポワール」でしょう。ポワールはその圧倒的な盛りで、学生や先生方の胃袋を満たし続けてきました。ポワール無き今、学生たちはどこで食事をしているのか不思議に思うほどです。私はハマチ刺身定食とカキフライ定食が大好きでした。皆さんは何が好きでしたか？

一方、当時はなくて今はあるものの最も大きなものは看護学科でしょう。平成8年にできているので、私たちが卒業した直後にできたわけです。医学部に医学科と看護学科があって一つのまとまった形と考えると、我々10期はまだ創成期の学生であったのかと感じます。いや、我々10期（9期、8期の先生方もおられると思いますが、ここでは平成7年卒をまとめて10期と呼ばせていただきます。）は、まず平成初めての入学であること、それと我々の入学と同時に最初の大学院生の卒業があったことを考えると、香川医大の創成期というよりは、その次の世代の最初の学年という位置づけでしょうか。



写真1：卒業記念品植樹



写真2：現在のソメイヨシノ

さて写真ですが、写真1は我々10期の卒業記念のソメイヨシノの植樹の様子です。当時の入野学長の傍らに立つのは李君です。彼はこういうキャラではありませんが、どうして彼にこのような大役がまわってきたのか不明です。とびぬけて学業が優秀だったからでしょうか。

写真2は現在のソメイヨシノです。元気に花をつけているようです。来年の春、またこの桜が咲くころには、コロナ禍は過ぎ去っているでしょうか。

我々10期が、どうしても忘れることができない出来事が卒業の直前にありました。平成7年1月17日未明の阪神淡路大震災です。実は私は親戚の結婚式で前日の夕方まで神戸にいて、香川に戻ったのは地震の数時間前でした。私が宿泊していたホテルは全壊していて、

地震が1日早く来ていれば私は無事ではなかったでしょう。神戸大学医学部の同期たちも、国試直前に着のみのまま逃げ回ることになっていたようです。震災は多くの人の命を奪い、多くの人の運命を変えました。そして我々は震災から多くのことを学び、そして考えました。

写真3は学長、副学長と10期のメンバーです。震災当時は無力であった同期も、卒業してすでに四半世紀が経ちました。ここに写るみんなが、今までに一体どれだけの命を救い、病気を治し、健康を守り、研究を達成してきたか考えると、非常に感慨深いと同時に自分もその一員であることに誇りを感じます。いつの日かみんなと再会し、またドンチャン騒ぎをしたいものです。



写真3：学長、副学長と10期卒業生メンバー
(筆者 最前列 左から4番目)

卒業記念に思う

杉田玄白記念 公立小浜病院 外科・消化器外科
前田 敏樹 (平成8年卒・11期生)

平成8年に卒業した私達にとって早25年が立ちました。時の流れは速いものですが、振り返ると色々なことが思い浮かべられます。卒業式では、私は学年代表として、答辞を述べました。国家試験を終え、約1週間かけて答辞をしたためたのですが、「答辞をのべるのに、試験に落ちていたら洒落にもならない」となんだか落ち着かない気持ちでした。卒業式ではテレビクルーや新聞社が来られており、しばしばテレビカメラに撮られたりインタビューまでされたりしたのに、その日のテレビニュースでは、私は全く映っておらず、華やかな女子の皆さんがテレビを独占しており、ただ四国新聞の端に「答辞を述べた前田敏樹さんは・・・」と写真無しで一行だけ記事がありました。その後植樹を行い、祝賀式を行いました。みんな晴れやかな顔ぶれではありましたが、その日で香川医科大学での生活が終わることに少なからず寂しさも滲んでいました。

そして、卒業して15年ほどでしょうか、はじめて同窓会をした時、香川医科大学のキャンパスに行きました。植樹で植えた木が、本当、細くて小さかったあの木が大きく成長しているのを見て感動した次第です。大学では私達が植樹した木を、管理して下さい感謝します。



2021年春



卒業アルバムより



私たち12期のソメイヨシノ

岡山済生会総合病院 内科・がん化学療法センター
 犬飼 道雄 (平成9年卒・12期生)

12期のソメイヨシノは、車で大学に入るとまず飛び込んでくる芝生の一角にある。卒業式を終え植樹してから、もう25年経つ。こうして改めて振り返るとみんなホントに若い！美男美女ぞろい！そして不思議なことにみんな今とあまり変わらない(笑)。ただ時の流れとは恐ろしいもので、私たちはアラフィフになっている。不惑から知命へ過ぎていくそうだが、私たちはどの過程にあるのだろうか。まずは日々幸せを感じ、健康であれば、それで充分である。

私たちが入学したところ香川医科大学は新設医科大学のひとつであったが、講義棟や体育館、図書館などの施設や附属病院は完備され、サークル・学祭・試験の過去問もひとしきり決まったものはあり、卒業された先輩も多くおられ、特に新設を意識することはなかった。バブルの終わりかけであったが南古馬場に行けば賑やかな繁華街があったし、琴電の瓦町駅も在学中に大きくきれいになった。高松で国体があったこともあり交通事情も次第によくなっていった。ただ大学周辺は飲食店も少なく、昼・夜になると寒川・ポワールなどに多くの医大関係者が集まっていた。最寄りの24時間あいているコンビニは旧空港あたりで、車を持っている先輩や同級生と車で20分かけて集ってイベントのようにわざわざ行っていた。

大学生活においては試験や出席に敏感であったことは言うまでもないが、終わりの見えなかった体育、難



満開の美しい姿(令和3年春)

解な数学、解剖学実習、P450など不思議と教養や基礎の頃を思い出す。サークルやバイト、恋愛・合コンなどおのおの胸にある大学時代の山のような思い出はそっとしておくとして、それを差し置いても公私問わず様々なことがあった。

先輩たちのソメイヨシノに迎えられ入学し卒業した私たちのように、12期のソメイヨシノは美しく満開の花を毎年咲かせ、香川大学に貢献している。香川大学や12期生という枠組みは、植樹をしてから仕事を除くと次第に薄くなっている。この同窓会報や香川大学卒業の研修医や同僚が貴重な関係性である。この原稿を担当するにあたり、大学時代の記憶をたどり写真を探し、楽しい時間を過ごすことができた。何よりいまだに繋がっているということ強く意識した。

長く連絡していなかった同期に連絡してみようと思う。よければみんなも。きっと12期のソメイヨシノのように話は膨らみ、花が咲くはず！今度は私たちのために12期のソメイヨシノに貢献してもらおう。

卒業アルバムより



～記念樹 桜の今～

香川大学医学部附属病院 呼吸器内科 科長（講師）
金地 伸拓（平成10年卒・13期生）

なんとも言えない重い空気が常に身にまとわりついている。そう、これは新型コロナウイルス感染症の流行による閉塞感だ。私は香川大学医学部附属病院で呼吸器内科医として働いているが、第4波の影響で5月の連休中も毎日のように患者が入院してきた。当院ではほぼ全診療科がコロナ患者を担当する。皆、使命感でこなしているが、できれば避けたい仕事。収入が激減する職業もある中、忙しいのは有難いことだが、第4波の収束が見えぬ中、オリンピックの開催も危ぶまれている。願わくばこの原稿が公表される頃にはふつうにスポーツ観戦を楽しめ、仲間と飲み会ができるようになってほしい。

さて「卒業記念に思う」であるが、正直私は卒業の思い出が全くない。なんと情けないことか。22年前だからであろうか。いや研修医1年目のことは、いろいろと覚えている。同窓会事務局から13期生卒業記念樹の今年4月の写真が届けられた（写真）。桜だ。天に向かってまっすぐに伸びた幹から多くの枝が出て、きれいな花が咲いているではないか。この写真を見て、ああ確かに植えた、と思い出した。正確には誰かが植えているのを遠目に見ていただけ。せっかくの機会なので現場を訪れてみた。医局から徒歩3分の距離なの



卒業アルバムより

に、22年ぶりだ。5月の現在、新緑が生い茂っており、今年もさらに成長しそうだ。足元には日光に弱い草花に適度な木陰を与えている。周囲には平成10年以外にも毎年1本ずつ植えられた桜が個性豊かに存在している。枯れた幹の脇から新しく太い幹が出ている木、根本から何本もの幹が出ている木、幹が途中でぐぐぐと曲がった木。なんだか人それぞれの人生のよう。枯れ

たり曲がったりしているのはその時々には何らかの大きな障害に直面したためだろう。

コロナ危機は世界にとって、あるいは個人にとって大きな障害だ。重症患者をみればつくづく思う。しかし生き抜くことができれば次がある。身にまとう閉塞感はいずれ必ず解放されると信じている。これを機に思う、少しずつでも自分なりに成長していきたい。卒業記念の桜のように。



天に向かってまっすぐに伸びているソメイヨシノ

記念樹と並んで

玉藻クリニック 院長
 泉川 美晴 (平成13年卒・16期生)

第16期生の泉川美晴と申します。現在、JR高松駅近くでクリニックの院長をしております。また、香川大学医学部 膠原病リウマチ科の協力医師として、外来や講義のために定期的に大学構内に出向いています。そのような立場から、このたび『卒業記念に思う』の特集に寄稿させて頂くことになりました。

さて、我々16期生の記念樹のソメイヨシノは、2001年3月の卒業式の日、講義棟の西側に植樹されました。この原稿の執筆にあたり、当時に想いを馳せようと、記念樹の横に立ちソメイヨシノの目線で景色を眺めてみました。

その樹高は講義棟と並ぼうかというほどに、幹の太さは倍になっていました。すぐ東側に隣接して講義棟の外階段が見えます。講義棟での思い出は、『星の王子さま』の原文を読んだ英語、「アー、ベー、ツェー、…」と発声したドイツ語、等角写像の作図をした数学、絵を題材にした心理学、自然現象と物理学、等々…楽しい講義も思い出されます。また、チトクロムP450の代謝(だったと思う)など生化学の小テストや統計学の講義を受けていたことも蘇ります。当時は、講義の内容をしっかり身につけようという意識は薄く、講義室に居ることに意義があると考えていた節がありました(医師となって猛省していますが)。そして講義の合間、外階段での息抜きが心地良よかったのを憶え



2021年春のソメイヨシノ



左側に外階段



左側に講義棟、奥側に実習棟、
右側に図書館

ています。その息抜きのタイミングと腹時計が合致してしまい、思わず早めのランチに向かってしまいそうになる誘惑と幾度となく戦ったものです。勝率は6割程度だったでしょうか。北東側には体育館があります。医学部の体育授業としては予想外の、激しい筋トレや本気のバドミントンを汗水流して行いました。南側には、凜とした佇まいの図書館が視界に入ります。スタンドグラスの光が注ぐ吹き抜けがお気に入りの空間だったことを思い出しました。南東側に視線を移すと赤レンガ床の中庭の向こうに、実習棟が今も変わらず白さを放っていて、実習棟での解剖や組織

などのハードな実習が思い返されました。試験前に、日没まで鬼気迫る様子で追い込みをかけていた当時の自身の姿が実習棟の中に一瞬見えたような気がしました。解剖学は私に驚愕と感動を与えてくれたにも関わらず、当時は試験に合格することだけを目標に目先ばかりの勉強をしたのではなかったか…。

このようにソメイヨシノと並んで学生時代を振り返っていると、過去の自分に『もっとしっかり講義を吸収してごらん』とやりたい気分になってきました。記念樹のソメイヨシノは、そんな説教臭いことは言わないものの、きっと、これからも香川大学医学部の学生を眺めながら、彼らの成長を温かく見守ってくれることでしょう。

ところで、COVID-19が猛威を振るい始める直前の2019年12月に、我々は絶妙なタイミングで同窓会を行い、同期と再会を果たすことができました。それぞれの近況を報告し合い、大学で活躍する人、地域医療に貢献する人、人生の分岐に悩む人、ワークライフバランスを実践する人、医師以外の道で活躍する人等々、卒後20年経って皆の方向性の多様さを実感しました。記念樹のソメイヨシノは、色んな方向へ枝葉を広げて上へ上へと伸びており、今年も綺麗な花をたくさんつけました。植樹20年、まだ樹勢のおとろえない若木です。まさに我々と同じ人生の成長期。讃岐の丘のソメイヨシノと共に皆様が活躍し健康であることを心よりお祈り申し上げます。



2001年卒業式当日の植樹風景



寄稿 恩師から貴方へ

「青春は手のひらにあるキラキラと輝くギアマン(ガラス)の玉なりや？」

香川医科大学第一解剖学講座 初代教授 島田 眞久

80歳を迎えております。勤務先で第1回目の新型コロナワクチンを接種して帰宅した折、郵便物の中に讃樹會からの原稿依頼の封書がありました。今、新型コロナ対策と今年4月からの介護報酬大改訂で大忙しの時でしたが、教え子からの依頼でもあり、受託することにしました。

香川医大に赴任したのは30歳代後半でしたので40年ほど前のことになり記憶も不確かになりつつあります。当初は、建物は全くなく、無造作に造成されただけの「讃岐の丘」でありましたが、これからのことを思うと不安よりも、「新しく医大を作り上げるぞ」と言ったファイトと言うか楽しみの方がはるかに勝っていたのはやはり若かったからだと思えます。最初、砂田学長、恩地・西田両副学長を除けば、任命されていた教授は7名だけでしたので我々は「七人のサムライ」と言っておりました。解剖学教授として、最初のメンバーに入ったのは献体の確保が必要だったからで、文字通り「0体」からのスタートでした。一県一医大構想で、医大を誘致するためには、地元(県)は三つの要件が必要であったと聞いておりました。一つは、「医師数」、一つは「看護師数」、今一つは「献体数」の確保がそれぞれできるかとの国から問いかけに対し、地元がいずれもイエスと答えて医大構想が許可されることでした。従いまして、私が香川に来た時には既に香川医大白菊会が発足しており、75名の会員がおられましたので、この方達と協力して献体活動を始めました。香川県は以前から教育県として有名であったこともあり、会員には元教職の方々が多くおられ大変

心強く思いました。新聞や市町村の広報誌などに継続的な記事を依頼する一方、県内の医療機関を始め、市町村の福祉課、各種老人施設、更には警察への訪問と献体に協力して頂けそうな所は毎年訪問いたしました。今でも印象に残っているのは、説法をしながら旅をしている僧侶に出会い献体協力のお話をすると即座に快諾頂きしかも、その場で会員になられたことです。というのも、香川に赴任する前に聞いておりましたのは、「香川は弘法大師の出られた所であるから、献体される方は少ないのではないか」、「死んだら皆仏様になるから、その仏を切り刻む様なことは受け入れられにくいのでは」と言ったものでした。この事を僧侶に話しますと、「死んだらすぐ誰でも仏になれるというようなことをお大師さんは言っておられません。仏に成るにはそれ相応の修行を積まなければなりません。どうもこれはテレビの刑事ドラマの影響を受けているようで、刑事が死体にひざまずいて、これでは仏が浮かばれないと言うシーンからきているのではないか」と言われ、「旅の先々で説法する際に献体のことをお話しておきましょう」と言われ大変感激したのを今でもよく覚えております。当初学生8人に1体で始まりました解剖実習も、その後、現職の国会議員や県知事も献体され県民の間に献体に対する意識が徐々に広がり、開校5年後には会員が580名まで増え実習も学生4人に1体、私が母校に帰る10年後には学生2人に1体と国の基準にまで達しました。離任後の平成8年には、2300名となり、中四国地方では岡山大学の「ともしび会」に次ぐ組織まで発展したとお聞きした時は感無量の思いでした。

香川医大に赴任しました時、砂田学長から言われましたことは、「医大創設にあたって香川県からも多大の経済的な協力を頂いているので、研究についても、地元に貢献するような研究をぜひやって頂きたい」と言われ、発足したのが、香川県引田で世界で初めてハマチの養殖に成功したものの、赤潮により甚大な被害も受けておりましたので、その原因と対策を追求する研究で、水産庁からの受託研究を受け、香川医大、香川大学農学部、県赤潮研究所、県漁連とオール香川の体制で10年以上に渡って行いました。原因を遂に突き止め、その結果を、「赤潮プランクトンによるハマチのへい死機構」として国に報告するとともに、Marine Biol、米国組織細胞化学学会機関紙 J Histochem Cytochem、Experient、

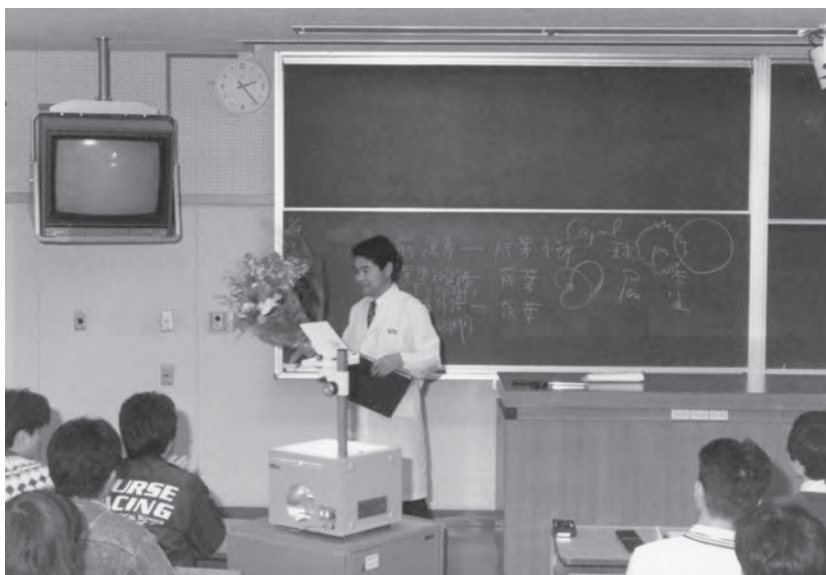


▲ 砂田輝武初代学長(左)と西田 勇副学長(中央)と筆者(右)
臨床講堂にて香川医大白菊会総会

J Plankton Res を始めいくつかの Impact Factorの高い国際雑誌に発表したのも大きな思い出です。

香川医大初期に入学した学生たちは当然先輩がいなかったわけですので、その先輩役として教官がその役を果たす様設けられたのが指導教官制で一人10名ほどの学生を割り当てられ、「懇親会などを通じ学生達の相談に当って欲しい。ついては経済的な支援もするから」と言うことで、なにがしかの補助金を頂きました。当初これは懇親会1回の支援金であると言われて、それならばと気前よく使ったら実は一年分であったと聞かされガッカリしたこともありました。しかし、この制度により、お引き受けした学生達に卒業後のことを、私が母校の大阪医大の同窓会（仁泉会）で経験してきたことをお話ししました。それは、「君達が卒業したら、同窓会を作り会費を集めなさい。そしてその会費で、卒業生の研究に補助金を出して後輩の研究を助けるように」という趣旨のものでした。そのことを憶えてくれていたのだと思いますが、1期生で指導教官として受け持った濱本龍七郎君が同窓会を設立され、初代の讃樹會会長として力強く引っ張って行かれたのに加え、現在の讃樹會会長の平川栄一郎君も濱本君と同じ1期生で私の指導教官の学生の一人でしたので大変感激しております。この縁もあって、会の研究助成の審査員を頼まれ快諾、教え子達の研究成果の審査を楽しんで長らくさせていただいておりましたが、寄る年には叶わず進歩する分子生物学の研究にもついていくのが困難になりだした頃、香川医大の卒業生の中からも教授が出現し始めましたので、私の役目も終わったと自覚して数年前に審査員をおろさせて頂きました。

在職中に、初代砂田輝武学長の弟子である当時の田中 聡学長から「先生は、私学から来られたのであるからその経験を生かして新しくできた運営諮問会議の副委員長として意見を言ってください」と依頼されお引き受けしました。この頃から国の財政難が進行して来ておりこの様な会をつくられたのではないかと思います。その後、国の懐が更に悪化したからだと思いますが、母校に帰って学長になった際、香川医大と香川大学との統合の話が出た折に統合委員会のメンバーとして、当時の田邊正忠学長からメンバーに入って欲しいとの話がありました。「私は言いたいことを遠慮なく言いますのでそれでもよろしいか」と言いましたら、「それこそ望むところです」とのことでしたので、お引き受けしました。統合後の香川大学創設準備委員、



▲ 香川医大 最終講義(昭和63年)

香川大学経営協議会委員、香川大学学長選考委員を経て、国立大学法人監事（非常勤）として参加させて頂き多くの貴重な経験をさせて頂きましたのが香川における最後のご奉公でした。統合後の初代香川大学学長選考に当たっては、「学長は理事長を兼任するのであるから、単に研究業績や人柄の評価だけでなく、経営感覚のある人も考慮に入れるべき」と主張し、国立大学法人に経営という考えを広めることに貢献したのではないかと自負しております。時代の流れもあったと思いますが、この考えは、昨今の国立大学法人の潮流になっているのではないかと思います。大学の支出の半分を占めるのが人件費であり、医大経営の主たる収益は病院収入によるものでありますから、国立大学法人とは言え人件費は国が負担するので私学側から見れば、大変うらやましく感じるのですが授業料が安いとはいえそれでも赤字というのは信じられないことですので、費用対効果を始め教員の給料もさげざるを得ないのではないかと意見具申をしました。法人後の香川大学がその出発にあたって、特色ある研究を公募し、世界に例を見ない「希少糖」の研究に決定したのも大きな思い出となりました。今でも、屋島にある家に帰った折り、香川大学農学部が開発したワインを購入するのを楽しみの一つにしておりますが、先日、そのワインの一つに希少糖から造られたワインを発見、早速購入して試飲した時はスッキリした味で感無量でした。

「打ち砕くともなお手のひらにあり」

//// 第8回 ////

～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3491人となり、約1000名が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後35年が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2021年5月26日におよそ1時間、JCHOりつりん病院にお伺いし、同期の大森浩二院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長 濱本龍七郎

JCHOりつりん病院の紹介



左(東)は健康管理センター、正面は本館(1階は外来)、奥に、中棟(4階建て)、さらに奥に南棟(7階建て)があります

JCHOりつりん病院について

JCHO(ジェイコー)りつりん病院は1950年末に設立された社会保険栗林病院を前身としています。250床を超える病院でしたが、社会保険庁(～2009年)解体の流れの中で、2012年に全国の社会保険病院、厚生年金病院、船員保険病院とともに、年金・健康保険福祉施設整理機構に接収されました。これが2014年に地域医療機能推進機構(Japan Community Healthcare Organization)に改組され、その傘下の全国57のJCHO病院のひとつとして再出発したものです。JCHOは、元WHO西太平洋地域事務局長であり、現在、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会会長である尾身茂氏が理事長を務め、合理化志向が強く、

税金を原資とする運営費交付金を一切受けていないなど、大変ストイックな厚労省所管の独立行政法人です。

当院は同窓の皆様には馴染みの栗林公園の東約400m、ことでん琴平線の栗林公園駅に隣接しており(図1)、栗林小学校や桜町中学といった人気の校区の中心にあり、近隣に多くの同窓の先生方がお住まいです。当院は16の診療科を標榜し、急性期3病棟118床、回復期2病棟81床(地域包括ケア病棟44床、回復期リハビリテーション病棟37床)の計199床を有し、急性期医療と回復期医療の双方を担う、自称ハイブリッド進化型二次救急病院です。すなわち、自らも7:1看護体制の急性期病棟において、脳卒中や心不全、肺炎などに対する非手術治療、外傷・骨折などの整形外科

手術や消化器外科手術などを含む急性期医療を提供しつつ、一方で、香川大学病院などの高度急性期病院の後方支援病院として、高度急性期治療を終えた患者を受け入れ、自院の急性期後の患者と同じ様に、リハビリ等を提供し、在宅・地域へと復帰させる回復期医療をも提供しています。さらに、在宅復帰後のフォローは訪問看護ステーションが担当します。厚労省所管らしく、まさに、地域医療構想/地域包括ケアシステムに順応した取組みを行っています。また、旧社会保険病院時代からの保健予防活動も継続しており、健康管理センターでは年間約1万9千件の企業健診・住民健診や特定保健指導などを行っています。事業規模は、常勤職員数約320名、年間医業収益は約35～38億円です。



▲図1 JCHOりつりん病院はことでも栗林公園駅に隣接しています。栗林公園まで西に400m。栗林公園駅の看板と、栗林公園案内標識、そして当院の看板が1枚の写真に納まります。

日常の診療スタイル

病棟運営は、病床機能別の診療科混合病棟なので、日常の入院診療においては必然的に診療科間連携が発生します。例えば、他科医師が主治医である入院患者であっても、糖尿病専門医が血糖管理を、循環器専門医は血行動態管理を担当します。また内科系の患者でも観血的処置は総合外科も得意な消化器外科医が安全迅速に支援します。この診療科間の連携は薬剤師、栄養士、リハビリ療法士、ST、歯科医、歯科衛生士、MEを含む多職種の間によって一層強化され、包括的な医療・ケアが実践できています。回復期医療においては、医師よりむしろ、コメディカルの連携が中心となります。脳卒中や整形外科術後の機能回復のための回りハ病棟では、入院料1算定の基準である365日リハによって実績条件をクリアするためリハビリ療法士（PT、OT）が主役となり、STや栄養士、社会福祉士などの専従、専任専門職が活躍します。さらに、地域包括ケア病棟においては、看護、ケアがより中心となり、在宅復帰率7割以上、在宅医療の提供、看取りに対する指針の運用などの実績要件を確保しており、入院料1の算定が可能となっています。

一方、外来には歯科口腔外科を含む16の診療科があります。患者（とその付き添い家族）は一回の来院で複数の診療科を

巡ることができ、かかりつけ病院として重宝されています。また、近隣の診療所から、高度医療の適応判断のために紹介いただくこともしばしばあり、高度急性期病院への橋渡しの役目も担っています。

COVID-19の影響と対策

2020年春先からのCOVID-19（コロナ）の流行に伴い、当院も患者数の減少に直面しましたが、この時こそJCHO病院としての責任を果たすべきと、呼吸器科や感染症の専門医もいない中、みんなで勉強してコロナと対峙する決断をしました。国の支援金事業を積極的に活用し、急性期病棟の一部を第2類感染症療養環境に改築して陽性患者を受け入れ、さらに、発熱者外来、陽性者トリアージやコロナ疑い患者の救急対応のため、完全に空間分離した第2救急室を増設するなどハードも整え（図2）、使命感をもってコロナ診療にも取り



▲図2 陰圧装置を導入し、「南病棟6階」の東側の一角をコロナゾーンに（左）、外来棟の西側の一角を第二救急外来に（右）それぞれリフォームして、COVID-19の診療を行っています。

組んでいます。当院では、コロナ診療にあたって、診療科間での“譲り合い”などは起こらず、一致協力して取り組んでいます。例えば、陽性患者の入院主治医を脳神経外科、外科、小児科が担当していますし、高松市保健所からの要請による陽性患者のトリアージ輪番については、眼科や整形外科も含めて輪番日の当直医が診療科を問わず助け合いながら担当しています。このように、医師同士の関係が良好なことが当院の最大の強みです。これにより、他のスタッフ間の絆も強くなり、実際この取組みにより、2020年度はむしろ、前年度比で、黒字幅を更新できました。

母校との連携

24名の常勤医師のうち、17名が香川大学の医局に属しており、12名は、讃樹会の同窓です。外科、内科、整形外科、脳神経外科、眼科、循環器内科、放射線科、小児科は、それぞれ母医局と密に連携していただいております。優秀な常勤医師を派遣いただいております。また、大変有り難いことに、香川大学の各医局から、外

来診療、健康管理センター、内視鏡室などの非常勤医師として30名以上の多くの優れた先生方を派遣いただいております。また、診療レベルを高く維持できております。また、上述のように、大学病院の高度急性期機能と、当院の特に回復期機能の間には医療連携が成立しており、地域の医療を支えるため、これを今後ますます強化したいと考えています。さらに、医学部教育にも参加させていただいております。地域医療実習などの臨床実習の学生さんや、また、決して数は多くはありませんが、初期研修医、専攻医の若い先生方に、JCHO病院ならではの、時代を先取りした病床機能と経営を意識した、長いキャリアにおいてきっと役立つユニークな体験をしていただいております。たまたま、現院長は、旧香川医科大学の第1期生であり、現在、讃樹会の副会長も務めさせていただいております。今後も、母校と讃樹会とJCHOりつりん病院の良好な関係が、発展的に末永く続きますよう、皆様、何卒、宜しくお願い申し上げます。



後列左より；四宮 あや(H10)、森崎 訓明(H9)、福長 健作(H21)、坊岡 阿紀(H30)、
山田 武叶(H29)、福永 浩太郎(H5)
前列；院長 大森 浩二(S61)、濱本龍七郎讃樹会名誉会長(S61)、藤村 貴志(H2) (敬称略)

TOPICS

皆さんご存じのブラックジャック（手塚治虫著）の名前を冠した夕刊フジのシリーズ新聞記事に、本学腫瘍内科の辻晃仁教授のお名前を拝見しました。そこで、辻先生並びに産経新聞社のお許しを得て、ご紹介させていただきます。

（名誉会長 濱本龍七郎）

この部分は冊子上では「夕刊フジ」掲載の新聞記事を掲載しておりますが、このホームページ上では著作権の都合により掲載しておりません。

夕刊フジ掲載 2021年4月3日付8頁

追 悼

武田先生さようなら、そしてありがとうございました



三期生

香川大学泌尿器科 杉元 幹史

2021年1月14日、10時12分に香川医科大学一期生の武田繁雄先生が永眠されました。あんなに大きくてタフな武田先生が亡くなったということは、今でも現実感がありません。

武田先生との出会いは、私が泌尿器科教室に出入りするようになった5年生の時からです。考えてみればもう35年も前になります。三期生の私より2学年上の武田先生は香川大学泌尿器科への入局者第一号、金の卵としてみんなに可愛がられていました。医局にはもう一人の武田先生がおられたため、繁雄先生は「B先生」と呼ばれていました。どういった経緯かは忘れましたが、私は医局に机を与えていただいております。授業後のかなりの時間そこで過ごしておりました。当時



息子さんの成人式のお祝い時のお写真(奥様より提供)

武田先生もまだ独身でしたので、よく「メシ食いに行こうか」と誘ってくれました。行きつけは、大学の近くの“豚太郎”というラーメンチェーン店です。その店はラーメン屋なのですが、焼き肉が食べられたのです。今から思えば、カチコチに凍った肉の塊をコンロで溶かしながら焼いて食べるという、とても今では考えられないようなチープなものでしたが、武田先生にごちそうしてもらったあの焼き肉は本当に美味しかったことをはっきり覚えています。

あの頃ですから、医局内での飲酒喫煙は当たり前の時代です。武田先生が泊まった翌朝には瓶ビールが1ケース空になっており、灰皿には吸い殻が山盛りでした。朝、医局に入ると奥の壁が見えないほど煙っていたのを懐かしく思い出します。とにかく豪快な人でした。

武田先生の次の学年には入局者がいなかったため、われわれ三期生の二人の入局者が武田先生の直接の後輩となりました。泌尿器科の、そして医師としてのイロハを教えてくれたのも武田先生です。その後は残念ながら同じ職場で働くことはほとんどなく、時々一緒に手術をしたり、学会や研究会の時には食事をご一緒させてもらったりする程度でした。いつもはニコニコしているのですが、私があまり調子に乗っているときには、しっかりとたしなめてくれる、そんな頼りがいのある兄貴のような先輩でした。

このようなことがあるたびにやっぱり人は死ぬんだな、という当たり前の現実を突きつけられて愕然とさせられます。われわれは職業柄、人の死に対する経験は多いはずですが、しかしそれだけにかえて身近な人の死に対しては無防備なのかもしれません。「もっと話しておけば良かった」、「あの件については誤解されたままじゃなかったのか?」、「あのとき素直に謝っておけば良かった」などと後悔することばかりです。

もういよいよ危なそうだというとき、これは結果的には亡くなる6日前だったのですが、私は先生の入院先に無理を言って面会させていただきました。そのとき

はもうすでにかかなりの痛みのため、モルヒネで鎮静をかけていました。しかし近々お姉さんや息子さんが帰ってこれるとのことで、少しでも意識がある状態でお話ができるようにと、ちょうど一時的に鎮静を緩めていた時期でした。なので私が行ったときには意識はありましたが、相当な痛みと吐き気を我慢しているようにみえました。私も武田先生の顔を見ただけで胸が詰まり、ほとんどしゃべることができませんでした。やっとの思いで、「今まで色々お世話になりました。本当にありがとうございました。」とだけ絞り出すと、にっこりと微笑みながらいつもの調子で、「それはいうな」とだけ答えてくれました。これが私と武田先生の最後の会話になりました。

武田先生は上下関係、ヒエラルキー、礼儀を特に大事にされるかたで、そのあたりのことについては非常に厳しかったです。私もこの年齢になって改めてその重要性を実感しています。順序を重んじられる先生が、順番を飛ばして逝かれるなんて納得できるはずありません。

昨年病気が発覚したとき武田先生は、「自分は死ぬことは全く怖くない。それより自分が学んだことを後輩に十分に伝えられなかったことが悔しい」とおっしゃっていました。

心配しないでください。武田イズムはわれわれが確実に継承しておりますので、ゆっくりおやすみください。またそちらで麻雀でもしましょう。

心よりご冥福をお祈りいたします。



武田先生の勤務先の水島協同病院に手術のお手伝いに行ったときのもの
(左から、土肥先生、内田先生、杉元(筆者)、武田先生)

国外留学助成金 留学レポート

米国研究留学体験記

CVPath Institute 坂本 篤志

(平成16年卒・19期生)



Maryland州GaithersburgにあるCVPathの入ったメディカルビル。従業員50名ほどの小さな会社です。従業員は基本的にアメリカ人ですが、ルーツはインド、中国、ペルー、ボリビア、スリランカ、韓国、ドミニカ共和国、ドイツ、フランスなど、非常に国際色豊かです。

2017年8月に渡米してからもうすぐ4年が経過し、留学生活も終わりを迎えようとしています。現在、帰国の準備をしながらこの原稿を書いています。COVID19のパンデミックにより、4年間のうち1年半ほどは不自由な生活を強いられることになりましたが、それも含めてとても貴重な人生経験を積ませていただきました。

1. 留学に至るまで

私は2004年に母校を卒業後、故郷の静岡県浜松市へ戻りました。初期臨床研修を終えたのち、浜松医科大学第三内科へ入局し、循環器内科を専攻することにしました。循環器内科は、急性冠症候群に対するカテーテル治療をはじめとするダイナミックな治療手技や、血行動態に直接関わる循環作動薬や抗不整脈薬などの薬物治療を有しており、患者さんに対して自ら行った治療の効果をリアルタイムに肌で感じることでできる大変魅力的な診療科です。卒後3年目から9年目までは、市中病院にて心臓カテーテル検査治療を主とする診療手技を学びました。臨床医として研鑽を重ね、循環器内科としての一般的な知識技術が身についてくる

にしたがって、患者さんに起こる病態の基礎となるメカニズムについて疑問に思うことが増えてきました。また全国各地で開催される学会や研究会へ参加し、海外留学で貴重な体験をされてきた先輩医師達の話の聞いたりするうちに、いつかは自分も海外留学をしてみたいと思うようになりました。そのためには研究をして論文を執筆し、目に見える実績を積むことが必要であることも学びました。結果、卒後10年目と遅ればせながら浜松医大第三内科の基礎系大学院に進学しました。

私は大学院に入学するまでは、基礎研究など全くやったことがなかったため、そこで学ぶ全てのことが新鮮でした。幸いなことに上司と同僚に恵まれ、自分の研究テーマを論文としての形にすることができたのが大学院4年目(卒後13年目)の時になります。この時点で、海外留学に出て行くためのスタートラインには立てたと感じていました。しかし、まだ海外のどの国のどこの施設に行くというところまでは決まっていませんでした。私としては、それまでに培ってきたカテーテル治療医としての経験と、大学院で学んだ基礎研究(主に細胞生物学)の経験の両方が活かせるような研究施設がベストだと考え、道を模索していました。

そんな折、虚血性心疾患に対する冠動脈ステントの病理研究で著名な、米国のCVPath Instituteが留学先の候補として挙がりました。CVPath Instituteには過去に複数の日本人フェローが在籍しており、浜松医大の上司がかつてのフェローの一人である東海大学の中澤学先生（現近畿大学循環器内科教授）と親交があったことで、中澤先生に話を伺う機会をいただくことができました。その折に私の留学希望を伝えたところ、米国Washington D.C.での学会の会期中にCVPath InstituteのPresidentであるDr. Renu Virmaniとの面接の機会をいただくことができ、そこから一気に海外留学への道が開けました。卒業後8日目にはじめて海外留学を志してから6年が経過していました。大変ありがたいことに、大学の先輩である愛知医科大学解剖学教室の内藤宗和教授、平井宗一教授よりご推薦いただいたことで、讃樹會より留学助成金もいただくことができ、2017年8月から米国での留學生活をスタートさせることができました。関わっていただいた全ての方々に、この場を借りて感謝いたします。

2. 米国での研究生活について

私が留学させていただいたCVPath Instituteは大学組織ではなく、従業員50名程度の小さな私立の心臓病理研究所です。米国首都Washington D.C.近郊の、Maryland州Gaithersburgに位置しています。世界的に有名な心臓病理学者で、2005年にCVPathを創設した Dr. Renu Virmani と、Virmaniの実息で循環器医 & 細胞生物学者でもある Dr. Alope V. Finnの二人のボスの元で、研究活動を行いました。Virmaniは現在78歳になりますが、エネルギーの塊のような方で、COVID19パンデミック以前までは毎月のように世界中の学会を飛び回ってプレゼンテーションを行い、また現在でも研究面での新しいアウトプットを常に求めています。Alopeは頭の回転が非常に速くアイデアが豊富で、CVPathの希少な研究資源を駆使し、次々に新しいプロジェクトを立ち上げています。現在、リサーチフェローは私も含め

て6人。日々助け合いながら仕事をこなしています。

CVPathの行っている業務は大きく分けて3つあります。1つ目は他企業から依頼を受けた、メディカルデバイスのパフォーマンスを *in vivo* / *in vitro* の前臨床試験を行って評価し、資金を得ることです（通称カンパニーク）。評価デバイスは主に循環器領域で使用されるステント、バルーン、バルブなどです。まだ臨床現場に登場する前の新規デバイスも多く含まれており、それぞれのデバイスがどのような開発過程を経て臨床医の元に届くのかを知ることが出来ます。日本でカテーテルインターベンションに従事していた私にとってはとても貴重な機会で、勉強になることばかりでした。我々フェローにもそれぞれカンパニークの割り当てがあり、*in vitro* 実験や顕微鏡下での病理組織性状評価、レポートの作成などを行います。1つのプロジェクトで何千万円というお金が動くことも多く、研究規模の大きさに驚かされます。興味深い結果の出たカンパニークについては論文化することもあり、これもフェローに任される仕事になります。

2つ目は、Maryland州内で発生した異常死体が集められる Office of the Chief Medical Examiner (OCME) という施設から、その死亡原因として心疾患の関与が否定できない症例、心臓手術後ないしデバイス留置後の症例の剖検心を受け取り、その病理診断・評価を行うというものです。OCMEのあるBaltimoreは全米でも有数の犯罪都市!?であることから、症例にはアルコールやドラッグ中毒者が散見され、



Fellow仲間と共に、上司の自宅でのfarewell partyに招かれました。右から5番目と6番目がBossのDr. AlopeとDr. Virmani。右から3番目が筆者、一番右が妻の慶子です。

また症例数にも事欠きません。OCMEへの報告が終われば、その後の病理検体の扱いはCVPathに委ねられており、これによって貴重な研究資源が日々蓄積されていくことになります。改めてVirmaniが築き上げたシステムの巧みに驚かされます。剖検心の冠動脈造影評価や、時に冠動脈イメージングIVUS/OCTでの血管性状評価、その後の病理所見との対比もフェローに任されている仕事です。

そして3つ目が、上記の業務で得た資金と資源を元にして行う研究業務です。フェローはVirmaniとAlokeのどちらかをsupervisorとして研究業務を行うのですが、私はAlokeの元でマクロファージと動脈硬化進行に関する分子メカニズムについての研究を行いました。動脈硬化巣において粥腫内出血を来した部位には、その出血部位の修復のため特殊なマクロファージサブセット（CD163陽性マクロファージ）が集まることが知られているのですが、このサブセットと1)石灰化の進行メカニズム、および2)粥腫破綻(plaque rupture)の起こるメカニズムに関して、培養細胞、ノックアウトマウスモデル、ヒト動脈硬化検体を使って多方面より研究を進めました。その間、米国内や欧州の他施設とのコラボレーション研究に携わる貴重な機会もいただき(Leducq Foundation, PlaQOmics group; PMID: 31021730)、同コラボレーションにおいて比較的大きな額のグラントも取得することができました。これら2つの研究テーマについては現在、主要ジャーナルに論文を投稿中です。それ以外の仕事としてVirmaniとAlokeが学会で行うプレゼンテーションのスライド作成、二人に回ってきた論文や研究助成金申請書の査読、エディトリアルコメント、総説論文や教科書の執筆など次々に仕事を与えていただき、結果として多くのアウトプットを達成することができました。動物実験についてはWashington D.C.にあるMedstar Washington Hospital Center内のExperimental Animal facilityにおいてブタ、ウサギ、ラット、マウスへのカテーテル治療や実験的手術介入など多くの手技に携わることができ、とても貴重な経験をさせていただきました。

また、COVID-19パンデミック時には初期にCOVID患者の急増したイタリア、ベルガモ市のPapa Giovanni XXIII Hospitalと連携し、重症COVID-19患者において冠動脈閉塞病変を伴わない心筋障害が起こるメカニズムについて、剖検心60例の病理学的な解析を行いました。結果、SARS-CoV-2によるウイルス性心筋炎は極めて稀な合併症であること、心筋炎自体が無くても心筋へのウイルス感染自体は存在していること、しかし心筋障害の本体が心筋末梢循環における微小血栓症であり、これがCOVID-19に特有の病態であ

ることを発見し、循環器領域における主要ジャーナルに報告しました(PMID: 33086866, 33478655, 33480806)。

3. 米国での生活について

家族3人での渡米後、当初は環境に慣れるのにも苦労しましたが、幸い妻も娘もそれぞれの環境でやるべき事を見つけることができ、この4年の間に充実した生活を送ることができたと思います。香川大学医学部の同級生で皮膚科医の妻は、米国国立衛生研究所(NIH)のDermatology Branchにリサーチフェローとして勤務し、皮膚免疫と皮膚マイクロバイオームの研究に携わることができました。研究論文も主要ジャーナルに無事に受理され、本人も納得する成果をあげることができました。小学4年生で渡米した一人娘は現在中学2年生となり、平日は現地の小学校に、土曜日はWashington日本語学校に通学して忙しくしております。COVID-19パンデミック時にはどちらも通学ができない状況となりましたが、米国はインターネット環境が充実しておりweb授業を通じて貴重な学習機会を継続することができました。なんといっても子供の言語吸収力は凄まじいもので、この4年間で英会話能力は格段に向上し、私たち夫婦から見てもうらやまし



一人娘の実来と飼い猫のMooです。日本に連れて帰る予定です。



Canada, YellowknifeでのAurora。最終日に素晴らしい緑の絨毯の鑑賞ができました。

いほど今後の彼女の人生における貴重な能力取得の機会となりました。

また、パンデミック前には米国、カナダを含めて何度かの長距離旅行を楽しむこともできました。フロリダ旅行ではセブンマイルブリッジをドライブし、メキシコ湾でのシーカヤックを楽しみました。エバークレーズ国立公園では野生のワニと遭遇し、アリゲーターとクロコダイルの見分け方を知りました。カナダ



旅行ではイエローナイフでの生のオーロラを鑑賞、ケベックでのセントローレンス川のクルーズ、バンクーバーでのホエールウォッチングなど、非日常を体験するとともに家族での貴重な時間を共有することができました。家族の時間を大事にできたことも海外留学で得た貴重な経験です。

4. 留学を終えるいま伝えたいこと

今の時代はスマートフォンがあり、どこにいてもインターネットに接続して必要な情報を取得することが出来ます。Google mapのおかげで、留学中に初めて車で訪れる土地であっても道に迷うことはありません。旅行先でも、タクシーの代わりにスマホでUberを呼べば、目的地まで労せず連れて行ってもらえますし、日本にいる両親や友達ともスマートフォンアプリを使って無料で電話ができます。多くの必要な物品はAmazonで購入して数日で自宅まで届けてもらうことが出来ます。書籍などで目にする昔の海外留学事情と比べると、格段に便利になっていて、海外留学自体のハードルも随分と下がってきているのではないかと思います。職場にて置かれる立場や、家族の状況などを考えますと、人生において海外留学が実現できる期間は限られています。しかし、後輩たちには是非、海外留学で得られる貴重な体験をする機会を積極的に持って欲しいと思います。

実際に日本から離れて、言葉も十分に話せない環境に飛び込んでみて、ここに来るまでの間、自分がいかに恵まれた環境で仕事できていたのかを実感しました。またこの留学を経験し、自分自身が異邦人である状況で日本人である自分自身の立ち位置を客観的にみる機会を持ったことは、帰国したあとの仕事や私生活を豊かにすることにつながっていくと感じています。我々家族はこの9月に帰国を予定しています。私自身は、帰国後再び浜松医科大学の循環器内科に勤務することになります。同門の皆様におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願いいたします。

パンプキンピッキングにて記念撮影。娘（現在中学2年生）も4年間で随分と成長しました。



カートレースは面白い！！ ～参加型モータースポーツの魅力～

Vol.6

医療法人田中内科クリニック 院長
田中淳一郎 (平成14年卒・17期生)

讃樹會の皆様におかれましては、ますますご清祥の事とお慶び申し上げます。

2001年度卒業の田中淳一郎と申します。

この度、広報局長である親友の谷丈二君より執筆依頼があり、引き受けさせて頂く事となりました。

私は卒業後、地元である三重大学第一内科へ入局し、消化器肝臓内科医として大学病院や県内関連病院で14年勤務した後、2016年に四日市市の実家のクリニックを継承し、今は消化器内科医というより総合内科医(なんでも内科医)として日々過ごしております。

さて、今回は趣味がテーマという事で、レンタルカートについて書かせて頂こうと思いますが、その前に私とモータースポーツとの出会いから入りたいと思います。

私とモータースポーツの出会いは1986年、小学3年生の時に車で40分のところにある鈴鹿サーキットで“鈴鹿F2レース”を観戦したのが最初でした。もともと幼少期から車が好きでしたが、初めて見る本物のレーシングカーのカッコいい外観や迫力あるエンジン音、目の前を一瞬で通り過ぎるスピード、オイルの匂い、全てに心が奪われ、1987年に初めてF1日本グランプリが鈴鹿で開催されるようになってからは、毎年観戦に行っていました。アイルトン・セナやアラン・プロスト、中嶋悟、鈴木亜久里が現役だった中高生の頃、自由席の土手で前日から寝袋で寝て、決勝日の朝

はエンジン音とオイルの匂いで目覚めていたのがつい昨日のように思い出されます。

ただ、モータースポーツは観戦するもの、と思いこんでいたので、自ら参加してみようとは全く思わず過ぎていきましたが、今から6年前、レンタルカートレースをしていた勤務先の後輩医師から、一緒にレースしましょう！！と誘われたのがきっかけです。

レーシングドライバーの登竜門としてレーシングカートがありますが、①最高速が100km以上(体感速度200km以上です!!)、②操作のレスポンスがダイレクトでクイック、コーナーでは数Gかかることもあり肋骨が折れることもあるほど肉体的にハード、③道具を使うスポーツであり、上位進出するためには新品のタイヤ、エンジン、車体フレームなど年間100万円以上は最低必要、と肉体的にも金銭的にもハードルが高く、なかなか競技人口が増えないのが現状でした。そこを老若男女誰でも気軽に乗れるよう汎用化し、お



カート1：2020年10月優勝時のトロフィー。



カート2：2020年10月優勝時の表彰台。



カート3：レース後のスナップ(一番右が筆者)。

小遣いの金額(月1~3万円程度)でレースにも参加出来るようになったのが、レンタルカートというわけです。レンタルの名のとおり、マシンはカート場の所有物なので自分でマシンを準備する必要はありませんし、手袋とヘルメットさえあれば誰でもレーサー気分を味わえます。

① レンタルカートは思いっきりスポーツである！！

レンタルカートといえば、マリオカートや遊園地のゴーカートイメージされる方が多いと思いますが、全然違います(笑)。いくら気軽に乗れるとは言っても、最高速は70km出ますし、目線が腰くらいの高さで体がむき出しであるため、体感速度は140km以上あります。また、パワーステアリングはないためハンドルは重く、初心者が10分乗った後は箸も握れなくなるくらいです。コーナーではレーシングカートほどではありませんが、1~1.5Gほど体に力が加わるので、体幹の筋力も要求されますし、肋骨骨折予防にプロテクターを装着する必要も出てきます。1周45秒のコースを50秒台でゆっくり走るだけなら体力は要りませんが、49秒台、48秒台と速度域が上がるにつれて倍々に筋力、持久力が要求されるイメージです。

② レースに参加することで勝つことへの喜び、速く走る事への探究心が生まれる！！

レースには個人戦、チーム戦がありますが、私が主に参戦しているのはチーム戦です。日本中のカート場で耐久レースが盛んに行われていますが、私の主戦場では、3時間の耐久レースを3~4人のメンバーで最低7回ピットストップし、マシンとドライバーを交代しながら戦います。マシンはタイヤやエンジンの程度により個体差があるため、ピットの際にマシンを交代する事で公平性を期しているのですが、勝つためにはドライビングテクニック以外に、どのマシンが速いか事前に分析したり、速いマシンに乗り換えできるタイミングでピットインしたり、戦略的な部分も

大いにあるため、総合力がないと優勝することが出来ません。参加し始めた頃はトップチームとは平均1周1~2秒は遅く、ゴール時には10周遅れになったりしたのですが、練習を積み重ねた結果、2017年の最終戦で初優勝を飾ることが出来、今では表彰台の常連になることが出来ました。勝つ喜びを得ることで、更に速くなりたい！！そのためにはどうしたら速くなれるか??を日々探究するのは医師としての成長にも繋がるメンタリティーではないかと感じております。

③ 喜怒哀楽を共有する事で仲間との一体感が強くなる！！

何といっても共に戦い、笑ったり喜んだり、時には怒ったりしながらもゴールした時は格別の一体感を感じることが出来ます。また、同じ趣味を持つ者同士で意気投合し、友人がたくさん増えました。カートを通じて得た経験、メンタリティー、そして仲間達は今の私の人生の糧になっていると言っても過言ではありません。

まだまだ書き足りないことが山ほどありますが、字数の都合上、ここで止めておこうと思います。最後になりますが讃樹会の皆様とお会いできる日を楽しみにしております。今後とも御指導・御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。



カート4：迫力のスタートシーン。



カート5：レース中の筆者。

「創部ものがたり」

～バスケットボール部編～

コロナ禍において40年ぶりにバスケットボール部の創部時代を振り返ってみた

磯病院 院長
磯

篤典（昭和62年卒・2期生）

香川医科大学に昭和56（1981）年度に入学し、それから40年も経過してしまった。今回、讃樹會広報局より同窓会報「創部ものがたり」にバスケットボール部を取り上げたいとのことで私に執筆依頼があった。随分と昔の事であり、記憶も朧げなことが多く、世はコロナ禍で落ち着かないので、一旦はお断りしたのだが、再度依頼があった。来年で還暦を迎えることもあり、時々自分の過去と未来に思いを巡らすことも多くなって来ている。過去を振り返る良い機会でもあるか・・・と自分を納得させて、筆を執ることにした。資料や写真もほとんど残っておらず、依頼を受けてしまった事を多少後悔しながら執筆したので、創部時の記録というよりも独りよがりな思い出話のような内容になってしまったが、「創部時の回想話」として読んで頂ければ幸いである。

私は香川医科大学2期生であり、真新しい新設医大にはバスケットボール部はなかった。スポーツといえば「バスケットボール」しか知らずに大学まで来た私にとっては些か残念ではあったが、医学部バスケットボールの部活動に期待している訳でもなかった。私が中心となって創部活動をした訳ではなく、大学にバスケットボール部が無いのは体裁がよくないということになって、1期生の松本康彦君、吉川善人君、2期生の影山淳一君、西沢洋一君、合田文則君と私などの経験者と同好者が集まって同好会的にスタートしたと記憶している。

部活は始まったが、最初の1年間は真面目な練習はほぼ皆無ではなかったかと記憶している。練習もなく望んだ夏の西医体は当然ボロボロ負けで予選落ちであった。私の記憶が正しいなら和歌山医大と対戦し、40-120くらいのトリプル・スコアを喰らった。これは私のバスケットボール人生で初めてのことであり、トリプル・スコアで勝った事は多々あるが、喰らっ

たことなどはない、ダブル・スコアもない。自慢ではないが、中・高時代に地区の強豪と目され、数年毎にインターハイ出場していたチームに所属していた私には、その負け方がカルチャー・ショックであった。涙が出そうになった。しかし、仲間は笑顔で敗北を受け入れていた。その敗北経験が私に火を付けた。勝てなくてもいい、負けたら泣けるチームを作る！とその時、心に決めた。

まあ、その後も練習には励んだが、2年間なかなか勝てないし部員もメンバーも安定しなかった。全ては私が至らなかったからだと反省している。レベルは甚だ離れていたが香川大学バスケットボール部と練習試合を組んだり、高松商業、高松高校などインターハイ出場高校と合同練習をさせて貰ったりした。社会人リーグにも最下部リーグから参戦した。4期生に伊藤哲史君、松田秀則君が入部し、部員を纏めてくれた。少しずつではあるが、3年目辺りから部活動らしくなったが、やはり勝てなかった・・・

この4期生では、清水（佐藤）恵美子君、田中あゆ



創部1年目の練習後

み君、石井（照下）真由美君、三好彩君ら女子が入部して女子バスケットボール部が結成された。インターハイ出場経験を持つ田中あゆみ君を中心とした女子部は結成当初から強く、結成数年目で西医体制覇するという輝かしい歴史を持つが、今回は男子部に焦点を当てて女子部の創部物語は別稿に譲りたい。

創部4年目になり5期生に岡勝巳君、香川昌弘君、行方浩二君、宮部和徳君らが入部して来た。この年に流れが変わった。社会人リーグで勝てるようになって来た。4部リーグから3部に昇格した。練習量を増やした。体育館練習に入る前に大学周囲6kmランニング、グラウンドでのラグビー部さながらの筋トレを加え、春季・夏季休暇は勿論、5月ゴールデンウィークも合宿を組んだ。部員は皆、よくついてきてくれた。辞めても不思議でない常軌を逸したハードな練習量だった。皆、部活中心の日々であったと思う。

5年目に医学部四国大会の主幹事当番となった。当時は、インターハイ経験者3名を擁する高知大学、190cm3名を擁する愛媛大学は西医体でも強豪と目されていた。会場は県立体育館、審判は香川県バスケットボール協会に依頼し、大会運営に臨んだ。勿論、大会運営も大切であったが、勝ちたかった。4つで万年ビリはもう嫌だった。

愛媛大学と最後まで競った試合は、その時の感覚を今でもはっきりと覚えている。勝てる手前までいった。シュート1本で勝敗が決まる程の接戦であった。相手も必死だった。結果は、負けであったが、この試合で本当の意味で医学部バスケットボール部になれたと思った。負けはしたが、陶酔感に近い充実感に包まれていたことを覚えている。3・4位決定線は徳島に勝利し、3位となった。万年4位から脱出であった。

創部5年目の西医体で初めて予選リーグを突破できた。確か奈良医大を破ったと記憶している。決勝トーナメントでは1回戦負け。相手は覚えていないが、強豪チームで点差が開いてしまった試合だった。負けて引退となる吉川善人君、西沢洋一君は泣いていた。チームメートは皆、口惜しさを滲ませていた。自分もこれで引退となるが、負けた悔しさに加えて、負けて泣けるチームを作ることはできたのかな・・・という充実感と中学からの長いバスケットボール競技から引退する虚脱感を同時に感じていたように思う。

その後のバスケットボール部は、34年の年月を後輩達によって、しっかり



創部2年目の西医体

とした足取りで脈々と歴史を積み重ね、現在に至っていることには喜びと感謝の気持ちでいっぱいになる。時々、OB会に出席させて頂くが、しっかりと組織運営と部員の多さに毎回驚かされている。

昨年からの新型コロナウイルス禍の中で学生生活に大きな活動制限が生じている現状ではあるが、この災禍を乗り越えて今後もバスケットボール部の更なる発展を祈念している。そして、学生達が色々な人と出会い、共鳴する経験を通し、充実した時間を過ごし、成長を促すプラットフォームとしてバスケットボール部が力強く機能し、存続していくことを願いつつ筆を置きたい。



創部4年目の部員たちと故細見弘教授(顧問)、前列中央 カップを持つ筆者

「10年後の私」の10年後

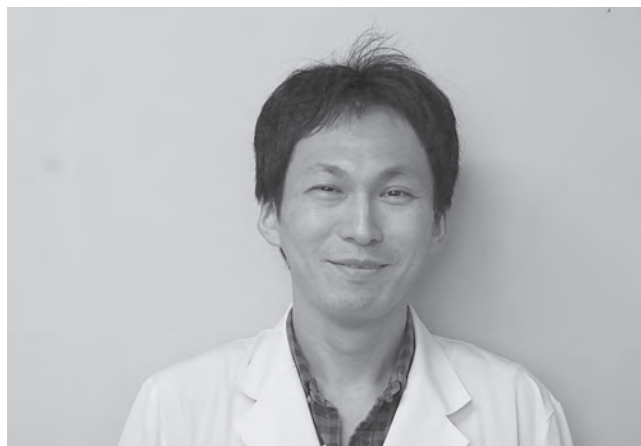
—コロナとオリンピック—

香川大学医学部 耳鼻咽喉科学

秋山 貢佐 (平成14年卒・17期生)

10年後の私の10年後、というよくわからない原稿の執筆依頼をいただき、めんどくさいと同時に大変光栄の極みでございます。執筆にあたり、10年前の自分の原稿を読んできましたが、つまらないことしかかいておらず10年前からろくな人間でなかったのだと改めて感慨深いものがありました。10年前から10年先のビジョンなどはなかったので予定通りにこれまで人生が進んでいるかは不明です。

早いもので私が仕事を始めてから20年近くたっていることとなります。自分の経歴を振り返ってみますと、私は20年前にカイロ大学を首席で卒業、10年前は大学院を同じく首席で卒業、そして現在に至るという素晴らしい人間でありました(なにぶん古いことですので記憶が曖昧ではありますが)。波風もありましたがこれまでの所は概ね順調に過ごしてこれたのではないかと思います。ソシャゲで言えば無課金で到達できる最高レベルくらいにはなっているように感じておりますが、逆に言えば現在の環境ではこれ以上成長しないであろうとも言えます。これからも特に大きな目標はなく、やりたくないことはたくさんありますがやりたいことは特にありません。もしかするとまた10年後に、10年後の私の10年後の私の10年後、の執筆依頼が来るかもしれませんが、おそらく10年後も内容スカスカの文章を書いていると思います。人間10年くらいではたいてい変わらないもので、むしろピークを過ぎた私のような人間は10年後にはかなり劣化しているものと思われれます。



最後に、これから功を成し名を上げようともくろむ志の高い、意識高い系の若いDrには是非頑張ってくださいと思います。オスキーやセンター試験の監督などは素晴らしい仕事です。2日間見返りのない試験監督が務まるようなら、どんな長い手術であっても無心で耐えられる不屈の精神力が培われます。オスキーを1日中見ていられるようならどんなにつまらない外来でも鮮やかに彩づいて見えることでしょう。私は無理でしたが、それらの小さな仕事の積み重ねが10年後に成功する自分を形成すると考えましょう。積極的に自分から志願して私のようなロートルからそれらを横取りする位の気概で取り組んでいただきたいと思います。私はこれまでの蓄えと若い先生の頑張りにすがって次の10年間を過ごしていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

香川大学医師会会報22号(平成24年2月発行)より転載



10年後のわたし

耳鼻咽喉科・頭頸部外科
秋山 貢佐

このコーナーにはここ数年私の同級生や年齢の近い先生方が執筆されており、そろそろ自分に回ってくるのではないかとびくびくしておりましたら、本当に回ってきてしまいました。依頼をいただいてから何を書こうかと考えてみましたが、10年後に自分がどうなっているかなど考えたこともなかったので、書くことがなく大変困りました。そもそも私は想像力が乏しく、実験計画や仕事のことなど長くとも1ヶ月くらい先までしか考える能力がありませんので1年後の私なら何とか書けそうですが、10年後というのはとても無理そうで、この稿を書くにあたっては大変な不適格人間であります。今現在も考えることは、明日の手術で失敗したらどうしようとか、来週の入院してくる人が変なオヤジだったらいやだなあとというくらいで、その日暮らしをしております。10年前にどんなことを考えていたかなと思い返してみると、10年前私はまだ6年生でしたが学生の浅知恵で、10年目の医者というのは一人前の目安で10年もやっていたらすべて自分ひとりで責任と自信を持って医療を行うことができ、車はベンツかセルシオ、着ているものは上から下までフランスもしくはイタリア製で、三越から外商がやってくるような生活をしているものと本気で思っておりました。現在その予想はことごとく外れております。10年後、私は40代前半になっていますが頭に浮かんでくるのは、今より体重が10kgくらい増え、毛根の多くが死に絶え、尿からは時にタンパクが漏れ、前立腺も肥大し、手術で手洗いしていても頻回に御手洗いに行かなくてはならないようになってきているような身体的なネガティブなイメージはすぐ浮かんできますが、なかなかポジティブな考えや理想像というのは浮かんできにくいものです。

そもそも10年後に医療環境はどのようになっているのでありましょうか。私は耳鼻咽喉科医であり、主に鼻の治療と研究を専門にしようと志しております。現在は国民病といわれるスギ花粉症の増加に代表されるアレルギー疾患の分野が耳鼻科の花形分野の一つです。しかし10年後には政府が英断してスギの木をすべて切り倒し、スギ花粉症が消滅し、また手術もロボットにすべて奪われなにもすることがなくなってしまっているかも知れません。そこまで極端でなくても現在の日進月歩の医療の進歩を見ておきますと10年後には医療の在り方もがらりと変わっているかもしれません。そのため10年後を考えてみてもあまり意味がなく、それよりもどのような状況になっても対応できるように日々、短期目標を決めてできることをこつこつと積み上げていくほうが大事で、その場その場の選択で次の10年間を乗り切ろうと個人的には考えております。という風に、まるで民主党政権の様な先見の明のなさをごまかしてまとめたいと思います。

10年後にひとつ望みがあるとすれば今は玉のようにかわいい3歳の私の息子が、10年後には鬼のように恐ろしい不良息子に変貌をとげていないことを願うばかりです。



学会開催報告

《第14回ICME国際複合医工学会学術大会(CME2020)実施概要》

日時：2020年8月1日—15日
開催形式：WEB開催

第14回ICME国際複合医工学会学術大会長
峠 哲男

CME2020は2020年8月1日—15日において、国際複合医工学会（ICME）、香川大学、太原理工大学の共催、および日本臨床神経生理学会の協賛により開催させていただきました。また、香川大学讃樹會を始めとする多数の方々からのご寄付を頂きましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。

当学術大会の運営および実施に関しましては、組織委員長として笈善行学長、副組織委員長として徳田雅明副学長、上田夏生医学部長、末永慶寛工学部長、大会長としまして峠、副大会長としまして正木勉教授、田宮隆病院長、郭書祥教授など、香川大学の役職者、教員の方々からのご協力を頂き、開催することができました。

新型コロナウイルス感染が蔓延する中、諸種の事情により当学術大会での講演及び発表はWEB上でのパワーポイント発表のみとさせていただきました。また2020年度は国際複合医工学会（ICME）が2005年に設立されて以来15年が経過するため、ICME設立15周年記念事業として記念講演会の開催と記念誌の発刊を行いました。

大会の内容では、講演についてはThe 15th Anniversary lecture of the founding of ICME が3題、Opening lecture が 1 題、Plenary lecture が 3 題、Invited lecture が1題、と計8演題の発表がありました。演題発表としましてはOrganized session が18セッション、General sessionが 3セッションで計86演題の発表がありました。Organized sessionのうち1セッションは香川大学医工連携セミナーとして、1セッションはWorkshop on human factors for safety and comfortable drivingとしてご発表いただきました。上記の演題発表の中から当学術大会Award committeeにより、Best paper awardとして3題、Best student paper awardとして3題、Best nursing

awardとして2題を優秀演題として選出し、結果をWEB上に掲載いたしました。

以上、当学術大会の実施概要について報告させていただきました。今後は医工連携を一つの起点として、多領域間での研究活動がより活発となり、香川大学がさらに発展されることを祈念する次第です。最後になりますが、当学術大会の実施に際しては不備な点が多々ありましたことを深謝させていただきます。

The 14th ICME International Conference on Complex Medical Engineering (CME2020)

(The 15th Anniversary of the Founding of ICME)



August 1-15, 2020

Takamatsu, Japan





教室便り

令和3年7月入稿

神経機能形態学

解剖学Ⅰを担当しています。三木崇範（教授）、鈴木辰吾（准教授）、太田健一（助教）の3名のスタッフに加え、小児科からの大学院生1名で教育と研究を行っています。最近の特筆事項は、多くの学部学生が当研究室に来ていることです。2年生から6年生まで総勢11名の学生が、神経科学や解剖学の研究に取り組んでいます。コロナ禍で、講義が対面形式と映像講義のハイブリッド方式となっています。研究意欲のある学生には、これは好機であり好きな研究に没頭することが可能です。通常の過密カリキュラムの中では、自由な時間が限られていますが、彼らは従前に近い学習の満足度が得られているようです。一見皮肉なようですが、意欲さえあれば、どのような状況でも関係ないということです。

2月に研究室の研究発表会を開きました。3時間半にも及ぶ発表会となり、予想以上の討論が繰り広げられました。学生の自主性のみにより実践されている研究こそ、研究マインドを育む源となり得ると信じています。彼らの益々の頑張りには期待しています。（三木 記）



組織細胞生物学

私、荒木が組織細胞生物学の教授となり15年目となりました。相も変わらずというところですが、教室スタッフは、私のほか江上講師、川合助教の教員3名、解剖技術職員1名、事務補佐員1名の5名体制で、教育と研究に当たっています。教育では、医学科の「解剖学Ⅱ（骨学、組織学）」に加え、臨床心理学科の「解剖学入門」を担当しています。

研究は、蛍光タンパク質融合機能分子の遺伝子導入発現による生きた細胞でのバイオイメージングにより、マクロファージやがん細胞におけるエンドサイトーシスや細胞運動の分子メカニズムを解析しています。最近、特に顕微鏡下で照射によるタンパク質活性の制御（オプトジェネティクス）を用いた研究に力を入れています。研究室には学部学生が多く出入りしており、研究をしたり勉強をしたりしています。昨年は、6年生の朴世薫君が、学部生としては初めて国際誌（Park et al., *Histochemistry and Cell Biology* 155, 9-18, 2021）に筆頭著者として論文を発表し、学部長表彰を受けました。楽しく明るい雰囲気の研究室ですので、卒業生の皆さんも気楽に来てください。大学院生、共同研究も大歓迎です。（荒木 記）

分子神経生物学

2013年8月に山本が着任し、名称が脳神経生物学から分子神経生物学に変わって8年目を迎えています。現在スタッフ2名が、2名の大学院生とともに、医局の先生方との共同研究を進めながら、教育・研究に取り組んでいます。

当研究室では自閉スペクトラム症・統合失調症などの精神神経疾患や、アルツハイマー病などの神経変性疾患の分子病態の解明と、虚血性神経細胞死の分子機序の解析を主目的に、我々自身が世界に先駆けて見出し、その機能を明らかにしてきた因子群の解析を中心に、研究を進めております。昨年度は、アルツハイマー病の原因物質であるA β の産生制御の分子機構について、我々が見出していた機構の重要性を、新しく作製したマウスモデルを用いて証明し、発表することができました。また、同様のマウスモデルを眼科学教室さんに着目していただき、その解析から正常眼圧緑内障における網膜神経節細胞死の機序についての新たな知見が見出され、炎症病理学教室さんのお力添えもいただいで、発表されています。

小さな研究室ですが、オリジナリティーに立脚したアイデアを抛り所に、基礎・臨床の先生方との共同研究も発展させつつ、教育・研究を進めています。（山本 記）

自律機能生理学

自律機能生理学では、令和3年4月から中国からの私費留学生1名と客員研究員1名が加わり、教授1名、准教授1名、助教2名、研究員1名、事務補佐員1名と合わせて、

8名体制で生理学の研究教育に取り組んでいます。

研究室の主なテーマは、血液凝固系とその受容体の血管生理学・病態生理学、肺高血圧症および炎症性腸疾患の病態解明と新たな治療法の開発、糖尿病、肥満などの代謝疾患、ミトコンドリア機能とアポトーシス制御蛋白質、平滑筋収縮機構の構造生物学など多彩な研究を行っていますが、強い協力のもと、教科書を書き換える発見や臨床に展開可能な基礎医学研究を旨に日々研究に取り組んでいます。最近の新しい展開として、血液凝固系が老化に関わる可能性を見出しています。加齢とともに凝固系が亢進することが知られていましたが、単に高齢者の血栓形成のみならず、老化そのものにも関わることを示唆されます。新たなアンチエイジング戦略を開発して、健康長寿社会の実現に貢献すべく、研究に拍車をかけています。

医学教育では、生理学Ⅱ（医学科2年次）と生理・薬理実習（医学科3年次）が担当科目です。今年度は授業コマ数を削減し、他の教科との重複を避け、植物生理学に特化した講義内容に再編しました。2年生後期の講義の過密を解消してほしいという学生の要望に応える対応の一つです。また、1年次から6年次にかけて設定されている各種研究室配属における研究指導は、基礎教室所属の教員の本分が大いに発揮される場です。実習最終日には、実習内容を発表させ、その後、実験方法の原理や得られた結果の論理的解釈についてじっくりと諮問し、医療プロフェッショナルとしての基盤となる厳密な科学的思考法の育成に励んでいます。

昨年度は新型コロナウイルス感染症の流行を機に教育方法にも大きな変革が余儀なくされましたが、この経験は、これまで課題がありながらも対応が遅れていた教育方法の改革に生かされるものと思います。情報通信技術を有機的に取り込み、より主体的な学修を推進する生理学教育を目指したいと思います。（平野 記）

薬理学

同窓の皆さまにおかれましては、平素より大変お世話になっております。薬理学教室の現状について報告申し上げます。薬理学教室は、教員4名（うち外国人1名）、日本人研究員2名、外国人研究員1名、大学院生5名（日本人2名、外国人3名）、実験補助員2名、秘書3名、医学部の学生4名に加え、米国カリフォルニア大学とタイ・タマサート大学からの短期留学生数名（現在、コロナのため、来日延期中）のメンバーで活動しております。

研究活動につきましては、基盤Bを始めとする科研費8課題のプロジェクトに加え、JSPS、AMED、JAXAなどからの外部資金の提供を受け、治療ワクチンの開発から宇宙実験に至るまで、世界最先端研究を目指して進めております。臨床応用に向けた臨床研究やサルでの前臨床研究のみならず、遺伝子改変マウス・ラットや肺魚・イルカに至るまでの様々な生き物におけるメカニズム解析、あるいはiPS細胞などの細胞レベルの検証を進め、さまざまなプロジェクトを展開しております。教育活動としましては、本年度もリ

モート遠隔講義・実習となりましたが、その一部は完全英語で実施しております。一方、最近注力しております社会貢献活動としましては、香川大学においてCOVID-19のPCRシステムを構築し、現在も当教室が中心的に検査を実施しております。

薬理学教室の具体的な活動内容につきましては、是非、ホームページをご覧ください（<http://www.kms.ac.jp/%7Eyakuri/>）。常に社会への貢献を念頭に置き、日々精進して研究・教育・社会貢献活動を進めて参る所存ですので、引き続き何卒宜しく願い申し上げます。

（西山 記）

生化学

生化学研究室では、現在、上田夏生教授と宇山徹准教授の2名の教員によって教育と研究を実施しています。昨年度から今年度にかけて研究室の体制に大きな変化があり、当講座で長年活躍されてきた大西平准教授が定年で退職し、宇山助教（学内講師）が准教授に昇進しました。また、大学院生および研究員として約5年半に渡って研究に従事してきたZahir氏（バングラデシュ出身）が、米国ピッツバーグ大学に博士研究員として参画することとなり、当研究室の出身者が世界で活躍することを喜ばしく思っています。教員以外では、4名の大学院生（日本人1名、バングラデシュ出身2名および中国出身1名）と1名の事務員が在籍しています。学部教育では医学科2年次の「生化学」の講義・実習を始め、早期医学実習や課題実習等を担当しています。所属大学院生に外国人が多いことからすべての研究セミナーや学部学生の講義の一部を英語で行なう等、生命科学を日本語・英語の両方で学べる機会を提供しています。

研究面では脂質代謝に興味をもっており、特に生理活性脂質*N*-アシルエタノールアミンの生理機能解析や、新規脂質代謝酵素群PLAAT分子の機能解析を行っています。PLAAT分子の遺伝子欠損マウスを用いた検討から興味深い知見が観察されており、疾患モデル等を利用することでさらなる発展が期待されます。また、上田教授がこれまで長きにわたって行ってきた「内因性マリファナ様物質（エンドカンナビノイド）の合成及び分解を触媒する酵素に関する研究」が認められ、国際カンナビノイド学会（International Cannabinoid Research Society）の2020年Mechoulam賞（学会賞）を日本人で初めて受賞しました。今後も世界に通じるユニークな研究をモットーとし、これまでに我々が見出してきた知見をさらに発展させ、世界に発信できるよう努めて参ります。（宇山 記）

医用化学

医用化学教室では、和田教授、栗原助教に加えて、総合生命科学研究センターの中北慎一准教授の協力を得て、医用化学Ⅰおよび医用化学Ⅱ、自然科学実習（化学）（令和2年度後期から医用化学Ⅰに統合）、大学院科目の教育を進めるとともに、全学共通教育科目の担当も担っています。ま

た、早期医学実習や課題実習（医科学研究）科目で学生を受け入れ、指導を行っています。昨年冬に勃発したコロナ禍の影響は依然として甚大であり、一部で対面講義も行われていますが、講義収録視聴が主となっている科目もあります。実習も人数を制限し、内容を改変しつつ、何とか教育内容・水準を維持するための努力を続けています。一方で、LMS（学習支援システム）の利点を生かした、より有効性の高い教育手法の導入も試みています。

一方研究面では、和田は引き続き医薬品原料合成に有効な新触媒の開発をすすめて、創造工学部等との分光イメージング法活用に関する共同研究を進めています。特に博士後期課程の最終年度を迎えた大学院留学生（工学研究科所属）が頑張っており、いくつかの論文が評価の高い論文誌に採択されるとともに、最近では水素利活用分野に有効な触媒を見出す等、新たな展開が広がりつつあります。栗原助教はドラッグデリバリーシステムや分子プローブの開発を進めています。引き続き少人数ながら、国際色豊かなメンバーで研究に励んでいます。

一方、和田は医学部国際交流委員会委員長として医学部の国際交流業務を担当するとともに、この令和3年4月から和田は学長特別補佐として、主にインターナショナルオフィスに関連する仕事を担当しています。コロナ禍の影響で国境を跨いでの日との往来が厳しく制限され、留学生の派遣受入れはほぼ止まったままです。その一方で、国際交流への学生の関心を維持し、学習機会を提供するためのオンラインプログラムの開発等を進め、「ニューノーマル」に適合したグローバル教育プログラム策定の試みを続けています。まだ難局が続きそうですが、皆様のご協力を得て乗り切りたいと存じます。（和田 記）

分子細胞機能学

分子細胞機能学は、中村隆範他、小川崇、野中康宏の両助教の3名の教員、大学院生1名、事務職員1名の5名によって本年も教育・研究にあたっています。教育面では医学科1年生の早期医学実習I、早期体験学習（チュートリアル）、医学科3年生の内分泌学（講義・実習）、統合講義（内分泌・代謝ユニット）、臨床心理学科2年生の生化学・分子生物学入門などを分担していますが、昨年より続く新型コロナのため、特に実習に大きな影響が出ています。今年も内分泌学実習はオンライン中心に進めることとなり学生との交流が大きく制限されることで、小川、野中先生は随分苦労されているようでした。一方早期医学実習Iなどでは、意欲溢れる学生さんが教室に来てくれ積極的に研究に参加してもらえたことが、助教の先生方にも良い刺激になったようです。自由選択科目の教育効果を感じるところです。

研究面では、助教の先生を中心に進めているガレクチンというレクチンファミリーに属する生理活性物質の構造生物学的な研究成果が最近やっと論文として採択されて安心しています。また、中村が中心となってここ10年来細々と続けてきた細胞培養に関する研究において、長年の課題をやっとクリアすることができました（個人的にホッとし

ています）。これも論文にまとめたいと考えています。今年を収穫の1年として、更に個性のある研究を進めて行きたいと思います。皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。（中村 記）

医用物理学

医用物理学教室では久富が学部教育や研究を進めています。久富は当教室で准教授として着任し12年目を迎えます。まだまだ発展途上で、努力と工夫を重ねているところです。特に昨年来のCOVID-19流行のため、遠隔講義の方法などの対応で苦慮しているところです。1年次の医学科学生に物理学の講義や実習を行っています。私自身は物理学を学んだあと医学分野で研究を行ってきており、両方の立場で考えて講義することを心掛け、将来医学を目指す若者に少しでも役に立てばと考えています。

研究面ではPETやSPECTを中心とした医用画像解析を進めています。具体的には画像の定量化、撮像時間の短時間化、撮像法の非侵襲化などを行っています。附属病院の先生方や技師さんにご協力いただき研究を楽しんでいます。最近ではAIを適用し、画像のノイズ除去、定量画像計算の可能性などについて挑戦しています。機会があれば他のモダリティでの解析にも着手したいと考えています。（久富 記）

腫瘍病理学

腫瘍病理学教室では、4月に横平政直先生が医学教育学教授に就任され、7月から水津太先生が新たに着任されました。研究面では、様々な癌（膵臓、胃、大腸、肝臓、肺、乳腺、腎臓、脳、骨軟部）のテロメア・テロメラーゼの研究や幹細胞の研究を行っています。病理切片上で遺伝子発現を調べるfluorescence *in situ* hybridizationやタンパク質発現を調べる酵素抗体法を主に行い、ヒトやマウスの生体内での変化の解明を目指しています。教育面では、バーチャルスライドを用いた病理標本画像のデジタル化によるオンライン実習に力を入れており、病理標本スケッチの学習効果を高めるためにもっと工夫していきたいと思っています。診療面では、病理解剖のclinicopathological conference (CPC) やキャンサーボードを通して、正確で専門性の高い病理診断や臨床医との協力体制を大切にしていきたいと思っています。また、令和1年から膵臓病理検討会を毎年主催し、多施設の方々にご参加いただいております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。（松田 記）

炎症病理学

炎症病理学教室は、昨年度准教授に昇進した千葉陽一准教授、村上龍太助教、新しく令和3年6月1日付で助教採用になった宮井由美助教（本学の20期生）、最後に上野と4

名での教室運営を行っています。本学部の名誉教授であり客員研究員でもある阪本晴彦先生と協力研究員の松本晃一先生には、研究・教育・診療でのご協力を頂いており、大学院2年次生の若松君が精力的に実験に取り組んでいます。また臨床講座から多数の若い先生を受け入れており、現在は、小児科・小児外科・麻酔科・脳神経内科・精神科・整形外科、(本年より新しく)周産期学婦人科学の先生方がそれぞれの研究テーマで進んでおります。教室では個々の先生の主体性を重んじつつ、認知症や様々な脳障害の病態解明とその予防、治療法に関する研究を行っています。最近では種々の輸送体が、脳内の脈絡叢上皮細胞に出現していることを報告し、現在脈絡叢内間質の線維化石灰化機序に関する新しい知見を見出しております。脈絡叢傷害関連認知症、という新たな概念の提唱とその病態解明に努め、讃岐の丘から世界に向け研究成果を発信し続けるよう、教室員一同一層努力していきます。(上野 記)

免疫学

免疫学講座がスタートして10年度目となりました。教授1名、助教2名、技能補佐員1名、事務補佐員1名のスタッフで、研究・教育を進めています。歯科口腔外科の大学院生である高尾先生は、希少糖を用いる研究を進めており、これまでの成果を特許に出願しました。令和2～3年度の免疫学の講義は、COVID-19の影響ですべてオンラインとなり、また、大人数で取り組む実習も中止しました。一方で、令和2年度の課題実習は医学科3年生3名、早期医学実習Ⅱは2年生2名、早期医学実習Ⅰは1年生1名が本講座を選択し、自分の手を動かす実験を行いました。学生が実験を経験することで、将来の研究に繋がるよう心掛けています。研究の特色としては、①樹状細胞の活性化メカニズムの解明、②希少糖による免疫機能の調節、③遺伝子改変マウスの作成による疾患モデルシステムの作成が挙げられます。新しいユニークな研究成果を積み上げていく所存です。今後ともよろしく願いいたします。(星野 記)

国際医動物学

2009年に新井が准教授として着任してから12年が経ちました。人事面では昨年9月に申田早苗さんを事務補佐員として迎えることができましたが、本年6月末に田中健助教が退職し、現在はスタッフ一人体制です。教育では医学科3年次生の医動物学(講義・実習)と4年次生の感染症ユニット(分担)、1年次生の医学概論コーディネーター、1年次生のチュートリアル教育(運営補助)を担当しております。臨床心理学科では2年次生の「微生物学・医動物学概説」(分担)を担当しております。さらに昨年度は一昨年に引き続き全学共通教育・主題B「海外渡航と健康」を担当いたしました。田中健助教の退職に伴い、同助教が担当していた課題実習・早期医学実習もひとりでこなさねばならず、早急な後任補充が望まれます。社会人大学院生の研究指導も継

続して行っており、本年中の学位申請を目標として論文作成に取り組んでいるところです。研究面ではマラリア伝播阻止の研究を行っております。実験に使用する蚊の飼育管理に多大な労力を要するのが難点ですが、国際希少糖研究教育機構からサポートしていただき、興味深い知見を得ております。この1年間のコンサルテーション業務としては、マダニ咬傷4件、甲虫類幼虫排出症例2件の虫体鑑定、その他の相談3件について対応いたしました。(新井 記)

分子微生物学

分子微生物学教室は教員3名、事務補佐員1名、技能補佐員2名で微生物学の教育研究を行っています。大学院生は現在2名ですが、今年度から国費留学院生2名が新たに加わる予定です。教育面では3年生の微生物学の講義および実習、4年生の統合講義「感染症ユニット」を担当しています。臨床心理学科2年生の「微生物学・医動物学概説」の講義も担当しています。将来、感染症診療に当たる際に必要となる微生物の基礎知識や臨床的な重要項目を着実に習得できるよう教材の改良などに努めています。研究面では腸内フローラの破綻と健康維持に関する研究を行っています。次世代シーケンスによる腸内フローラの解析が容易になったことで、腸内フローラと疾病との関連についての研究が活発に行われています。当教室でも新しい解析技術を取り入れ、腸内フローラ研究をさらに推進し、社会に還元できるような研究成果を発信していきたいと考えています。(桑原 記)

衛生学

衛生学教室は准教授・宮武と助教・鈴木の2人で構成されています。今年度は3名の大学院生と共に一緒に楽しく活動しています。宮武先生の温かな指導の下、昨年度は20本の論文が国内外の学術誌に掲載されました。

教室の研究は、メタボ、2型糖尿病、慢性腎臓病の生活習慣改善支援に加え、行政と協同で子どもの生活習慣改善対策事業や子育て支援事業、小中学校にネット・睡眠関連の調査をした上で啓蒙活動も行っています。また、国際教育部と英語学習プログラムの作成に関する研究も行っています。

去年度に引き続き、コロナ禍で対面による講演や勉強会が難しくなりましたが、試行錯誤しながらオンライン技術を取り入れ、様々な取り組みをしてきました。子育て支援事業として子育てプログラムや親との交流会、支援者との研修会を毎月2回程度オンラインで行ったり、English Online Seminarを定期的で開催し、医学部学生や教職員、医療従事者などと楽しく英語で話し合う機会を持ち続けています。

計画通り進まないことが多い昨今ですが、今後も引き続き、新たなことにチャレンジしつつ、教育、研究、社会貢献等を積極的に進めていきたいと思っています。

(鈴木 記)

公衆衛生学

教室のスタッフ、大学院生等に変更はありません。昨年引き続き、老若男女、留学生等、多彩なバックグラウンドを持つ者が研鑽を積んでいます。教育について、コロナ対応も2年目に入りましたがほとんどの授業がオンラインで行われています。リモートによる演習、グループワークの実施などの工夫を行っていますが、ワクチン接種も進んでおり、対面授業の再開を心待ちにしています。また、ここ数年香川県と共同で行っている「公衆衛生トークセミナー」について、感染予防のため参加人数を制限しながらも開催を継続しています。引き続き、社会医学を目指す学生、若手医師の育成を続けていきたいと思っております。学術活動としては、香川県小児生活習慣病、香川県民健康栄養調査をはじめとする地元密着型の研究、メタボリックシンドローム対策のためのサプリメントの開発、高齢者の体力推移と維持、緩和ケアにおける鍼灸治療の効果に関する研究などに取り組んでいます。(平尾 記)

法医学

2020年度は学術活動もコロナ感染拡大の影響を受け、国際学会の中止のみならず、国内学会も多くが誌上開催やオンライン開催となりました。国内では6月から9月に延期された第104次日本法医学会学術全国集会(京都)で田中、ジャーナル、伊藤が発表しました。

教育に関しては、多くがオンライン講義に変更されましたが、8月末からの法医学の系統講義期間は、幸いなことに対面での実施が可能でした。ただ、実習は密を避けるため、縮小して演習のみの実施となりました。警察学校での講義や日本医師会の検案研修会も講義形式の変更を余儀なくされたりと、大変な1年となりました。

人事面では、2020年12月に伊藤先生が母校の徳島大学に異動しました。事務の長野朝美さんの任期満了に伴い、12月から松田瞳さんに交代しました。また2021年3月末で田中先生が退職し、大学院生の永田健さんも諸般の事情で九州に戻る事となりました。剖検実務・検査に関しては、少ない教室員全員で協力して行っています。今後とも、讃樹会の先生方には一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(木下 記)

医学教育学

医学教育学講座の近況をご報告申し上げます。

当教室におきましては2021年3月末をもちまして岡田宏基教授が定年退職されました。岡田教授は初代の香川大学医学部医学教育学講座教授として、また医学部教育センター長として11年間に渡り本学の教育体制の中心的役割を担ってこられました。岡田教授がご在任の間には全国的に医学部の教育改革が進む中で、CBT (Computer Based Testing) やOSCE (Objective Structured Clinical

Examination) の導入、及び医学教育の質保証の面から医学教育分野別評価の受診という難題が数多くありましたが、全て無事乗り越えることができました。これも讃樹会の皆様のご協力の賜と、岡田教授に成り代わりまして心より感謝申し上げます。

さて、岡田教授の後任として4月より新たに横平政直教授が医学教育学講座教授及び医学部教育センター長として就任されました。横平教授はこれまで腫瘍病理学講座の准教授としてご活躍でしたが、香川大学の全学教育にも深く携わってこられたご経験や、外科医としてお仕事をされたご経験もあり、基礎・臨床の垣根を越えた幅広い教育視野をお持ちの先生です。これから横平教授と講座スタッフ一丸となって、さらに香川大学医学部の教育体制を発展・強化できるよう努力して参りたいと考えております。

今後とも讃樹会の皆様の一層のご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。(坂東 記)

血液・免疫・呼吸器内科学

讃樹会のみなさまにおかれましては、Covid-19対応を含めご苦労も多いかと拝察申し上げます。血液・免疫・呼吸器内科学教室の近況をご報告申し上げます。

門脇則光教授が講座を主宰され7年目となりました。教室ならびに診療科の運営はもちろんです。感染制御部長としてコロナ対策の中心的な役割を担っておられます。本年度の教室新入局は4名で、年々新たな仲間が増えており本当に嬉しい限りです。入局者も徐々にではありますが増加しておりますので、今後讃樹会の先生がお務めのご施設への医師派遣も増えて参ると存じます。是非とも温かく受け入れて頂けますようお願い申し上げます。

診療についてですが、呼吸器内科診療科長を本年4月から、金地伸拓講師が担っておられます。外来診療は、血液内科5名、呼吸器内科3名、膠原病・リウマチ内科7名で担当しています。県内外の讃樹会会員の皆様のご支援により、3診療科で4,296名(内紹介患者:537名)、入院患者580名を診療させて頂いております。今後も先生方のご期待に添えるよう、医局員全員で頑張ってお参ります。研究は門脇教授のライフワークである癌免疫療法が3人の大学院生を中心に進んでいます。癌免疫学の最新の研究成果を中心に、昨年度は3名の学位の取得を指導されました。昨年度のイベントとしては2021年3月13日(土)に『第60回日本血液学会 中国四国地方会』をサンポート高松・香川国際会議場にてハイブリッドで開催され、盛会に終了いたしました。関係者皆様のご協力に深く御礼申し上げます。

以上近況報告をさせて頂きました。讃樹会の一層のご支援を賜りますよう教室員一同心よりお願い申し上げます。Covid-19対応にて皆様お疲れと存じますが、くれぐれもご自愛ください。(土橋 記)

循環器・腎臓・脳卒中内科

南野哲男教授が講座を主宰され、6年目に入りました。教室・診療科の運営に加えて副病院長・臨床教育研修支援部部長と病院の要職を務められています。今年度は2名の新しい先生方が教室に加入されました(循環器グループ 川口圭吾先生、腎臓グループ 山本珠愛先生)。心臓グループ、腎臓グループ、抗加齢血管(脳卒中)グループが緊密な連携を取りながら全人的な医療を提供しています。また、循環器ホットラインや救命救急センターとの連携にて地域医療を支えるとともに、重症心不全患者や難治性腎炎患者に対する高度先進医療を実施し、地域の皆様に高度で最新の医療を提供いたします。新たに重症心不全患者に対する左室補助人工心臓(LVAD)の管理施設にも認定され、さらに特定機能病院としての役割を担っていく所存です。

今後も、「地域と歩み、ひとを育む」をポリシーとし、香川県の地域医療を支える人材の育成や循環器系救急医療ならびに安心・安全の標準療法の実践を目標に教室員が丸となって取り組む所存ですので、今後とも讃樹會会員の皆様におかれましては、一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。(祖父江 記)

消化器・脳神経内科

私が教授となり、もう14年目を迎えました。

現在、人事で動く教室員は医学部の教室の中で、最大規模の100名を超える人数の教室に成長しました。それぞれのグループの現在の臨床と研究について述べます。

・肝臓グループ

各種肝疾患の最新の治療、特に進行肝細胞癌の臨床研究に力を注いでいます。研究の面では、大学院生を中心に疾患の病態、治療効果のバイオマーカーとしてのmicroRNAを探索しています。臨床研究では、森下朝洋 講師、谷丈二 学内講師が中心となり、基礎研究では、消化器グループ藤田浩二 学内講師がチーフとなっています。

・消化器グループ

早期消化器癌に対して、内視鏡的粘膜剥離術は香川県でトップの症例を誇っています。また研究面においては、新しい内視鏡治療機器開発に力を注いでおり昨年はコロナ感染防止のための新しい内視鏡システムを開発し、海外論文及びマスコミにも取り上げられました。この部門のチーフは小原英幹 講師です。

・胆膵グループ

膵疾患において、胆膵内視鏡関連検査は中四国においてトップクラスであり、チーフリーダーは鎌田英紀 学内講師です。基礎的研究では、胆膵悪性腫瘍においてmicro RNAのバイオマーカーとしての意義についての研究をしています。

・神経内科グループ

この部門の責任者は、出口一志 准教授です。外来の紹介患者は、年々増加しており入局者数も増加しています。研究面において、神経疾患の特徴的な病態にmicroRNAがど

のように影響しているのかを検討しています。

どのグループも多くの臨床研究、基礎研究を海外に発表しており、その論文インパクトファクターは100点以上となっています。

今後も多くの研究成果を世界に向けて発信していきたいと思っています。(正木 記)

皮膚科学

大日輝記教授が就任し、香川県内の皮膚科医療の再構築を目標とする新体制を発足して2年目に入りました。まずは院内や地域において当科の存在感を示していけますよう医局員一同、日々努力する所存でございます。院内においては他科からのコンサルト等には誠実に対応し、随時フォローも行い、先生方から信頼される皮膚科となることを目指しております。県内で皮膚科入院できる施設は非常に少なく、地域においては県内外の病院や開業医の先生方とネットワークを形成することで円滑な診療を行えることを目指しております。症例検討会では他院の先生方にも参加して頂きお互いの施設の症例の検討なども行なっております。まだ始まって間もない医局ですので何かと至らぬ点があるとは存じますが先生方のお役に立てることがございましたら、どうぞご遠慮なくご紹介等頂ければと存じます。讃樹會会員の皆様には一層のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。(榎原 記)

精神神経医学

当講座に中村祐教授が就任して17年目を迎えました。中村教授就任以降、香川県内の精神科医療の連携を図るため、香心会が創設されました。また、香川県との連携も進められ、地域医療精神医学講座が開設されました。この間に医局員は増え、同時に精神保健指定医も増えております。香川県内の関連病院にも人材を派遣し、香川県の地域医療を支える一助となっております。2018年度から新専門医制度が始まりましたが、本年度も3名の専攻医を迎えることができました。

現在、認知症から児童・思春期(摂食障害を含む、2014年4月1日より「子どもと家族・こころの診療部」を引き継いで運営)、睡眠障害、緩和ケアなど、全ての精神科領域をカバーして診療を行っています。身体疾患を合併する患者様については、身体科の先生方には大変お世話になっております。また逆の場合もあろうかと思えます。今後も、香川県の地域医療の支えとなるよう、医局員一同努力する所存です。讃樹會の先生方にはより一層のご支援を賜りますようお願い致します。(今井 記)

小児科学

今年、日下教授就任8年目となる当講座は、「成長期」を迎えています。この成長期における1つの大きな出来事として、2017年の香川大学医学部小児科学講座同門会設立後、同同門会誌の初回発刊を、2021年4月に行う事ができました。同門会の名称が「瀬戸快風」となったことから、当講座からの新しい風で医局員たちの更なる成長を後押ししたい所存です。

当大学における卒後臨床研修の小児科コースでは、初期研修期間に「小児科医として必要な夜間の救急外来初期対応ができるようになる」ことを目標に、夜間当直のトレーニングも積極的に行っています。今年は、初期研修1年目小児科コースは5名（坂東里佳、平場真優、田中久夢、草薨諒一郎、金平孝彰先生）、小児科専攻医4名（大学：川口幸穂、岡本夏海先生、四国こども：豊島桃子、品部佑太先生）に加え、自治医科大学出身の井上依里先生がNICU研修を開始されています。また、国立成育医療研究センターアレルギーセンターにて2年間国内留学していた荻田博也先生と、四国こどもとおとなの医療センター新生児科にて1年間研修を行っていた横田崇之先生が、多くの事を学んで大学に帰ってこられ、医局内は活気に溢れています。

研究では、大学院生4名（山戸聡史先生、寺田一也先生：四国こどもと大人の医療センター、新居広一郎先生：小豆島中央病院、川本昌平先生：香川県立中央病院）が卒業され、現在の12名の院生が継続して研究を行っています。また、研究協力員である杉野政城先生（四国こどもとおとなの医療センター・新生児科）が、2021年5月に開催されたアメリカ小児科学会にて、Japan Pediatric Society (JPS)/SPR Fellow's Exchanges Awardを受賞され、今後の更なる活躍が期待されます。

新型コロナウイルス下で先行き不透明な状況ですが、香川県小児医療を支えていくため、医局員一丸となって精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。（中村 記）

周産期学婦人科学

我々の教室は、2019年4月に第3代 金西賢治教授が就任して3年目を迎えました。近年の分娩取り扱い件数は、西日本の大学病院の中ではトップであり、総合周産期母子医療センターであることからハイリスク周産期症例のハイボリュームセンターとしてその役割を果たすべく教室員は頑張っています。4月の日本産科婦人科学会においては、天雲千晶先生の大学院での研究が学会賞を受賞し、5月からは婦人科腫瘍や遺伝医療のスペシャリストである鶴田智彦准教授が我々の仲間に加わりまして、研究活動やがんの診療がいちだんと充実した環境になりました。さらに周産期・婦人科腫瘍・生殖医療・女性医学などのサブスペシャリティの専門医が揃い、医育機関としても大変充実した体制になりました。老若男女、子育て世代など教室員のライフステージにあわせて、また得意分野は伸ばして個性は活

かせるように働き方を改善してまいりました。入局希望者も少しずつ増えてきており、教室のアクティビティが年々高くなっていると感じています。開学以来の周産期魂を継承しながら、専門性の高まる現代の医療において大学病院の使命を果たすとともに地域医療に貢献できるよう教室員一同頑張っ参りたいと思います。（花岡 記）

心臓血管外科

堀井泰浩

山下洋一（准教授）、北本昌平（助教）、阪本浩介（病院助教）、中川さや子（医員）

心臓血管外科は、循環器内科と病棟を共有し、ハートチームとして機能しています。

つまり、患者さんを中心に、内科で診断の上、薬物療法やカテーテル治療を先行させ、必要があれば外科治療し、その後再度内科治療を徹底しています。

外科治療としては、虚血性心疾患、弁膜疾患、不整脈、心不全と多岐にわたる疾患を対象としますが、動脈硬化性変化を基礎に、高齢化社会を反映し、単一疾患を治療して終了する訳ではなく、術後も心不全をはじめとした治療の継続が求められ、内科外科の垣根を取り払い、最適な治療を選択しています。

いずれの分野でも、技術の向上、治療機器の開発など、日進月歩の進展があり、その全てに通暁できる訳ではありませんが、最新の知識と最高の技量を追い掛けて、患者さんに最善の治療を届けられるように、日々専心しています。（堀井 記）

消化器外科学

当科は「患者さん中心の全人的医療の提供」を理念とし、手術を柱とした安全かつ高度な医療を提供しています。日本消化器外科学会の指定施設であることに加え、日本肝胆膵外科学会の高度技能専門医修練施設A（全国で約120施設、香川県で唯一）にも認定されており、高難度肝胆膵外科手術の安全性と長期成績は高く評価されています。中でも難治性の膵癌に対しては、術前化学放射線治療を加えることで成績は向上しており、世界に向けて情報発信を続けています。また他の消化器癌疾患に対しても、集学的治療や低侵襲手術を積極的に取り入れ、治療成績向上に取り組んでいます。移植医療としては、四国唯一の膵臓移植実施施設（全国18施設）に認定されており、1型糖尿病患者さんに対する膵臓移植を行っています（過去9例に施行）。今年度は藤木医師（卒後5年目）、細谷医師（卒後3年目）の2名の新入局員が加わり、教室は若い力で活気に満ちています。若手からベテランスタッフまで多数の手術を受け持ちながら、さらなる治療成績向上へ向けて日々精進しております。

研究面では、現在4名の大学院生を中心に、膵癌や食道癌、大腸癌などの研究テーマを持ち、熱意をもって取り組

んでおります。今後も患者さんのお力になれるようにスタッフ全員が誠意を持って診療を行ってまいります。今後ともご指導を何卒宜しくお願い致します。

(浅野 記)

呼吸器・乳腺内分泌外科学

当教室は横見瀬裕保教授が就任して最終年となる23年目を迎えました。4月から倉敷中央病院から藤本医師が帰ってきて、また山田医師が当教室に入局してくれました。今年度の体制は呼吸器外科12名、乳腺内分泌外科3名体制となります。ここ数年、毎年若手医師が入局してくれており、教室全体は活気に満ち溢れております。

臨床においては、Covid-19感染症の影響で手術制限等がございましたが、年間手術症例は390例を超え、四国においてトップクラスを維持しております。また年間肺癌手術症例は昨年を上回り過去最高である159例でした。これはひとえに皆様方のご支援とご協力のおかげです。誠にありがとうございました。また肺癌、縦隔腫瘍に対してロボット支援手術を症例を選択しながら行っております。放射線科、呼吸器内科、病理診断部といった様々な科と定期的に合同カンファレンスを行い、積極的に意見交換しております。

当教室には県内外に関連施設（高松市立みんなの病院、KKR高松病院、坂出市立病院、高知医療センター（高知県）、神鋼記念病院、明和病院（ともに兵庫県）等）があり、20名を超える医局員がそれぞれの場所で活躍しております。

研究においては5名の大学院生を中心に、肺癌の遺伝子解析を基にした治療法の開発、メディカルガスを用いた長期肺保存と肺移植、ICG蛍光カメラを用いた手術手技の開発、気管や肺の再生医療、肺癌のSTASについて等を研究テーマとし、日々熱意をもって取り組んでおります。

当教室の合言葉は、「art, heart, science」です。すなわちart（卓越した技術）、heart（患者さんの身になり）、science（科学的根拠）に基づいて、自分が最も愛する人に行う治療を全ての患者さんに行うことです。医局員全員がその言葉を胸に、最新で最適な治療を患者さんへ提供できるよう取り組んでまいります。今後とも御指導・御鞭撻のほど、何卒宜しくお願い致します。

(加藤 記)

整形外科

整形外科は山本哲司教授が就任17年目を迎えました。昨年度は入局者がゼロと厳しい状態でしたが、今年度は小野健太郎先生、佐藤容平先生、田中秀典先生の3名に入局していただき、医局内が活気づいています。手術件数が制限されるなど新型コロナウイルス感染症に関係する暗い話題が多い中、元気ある新入局員の存在は非常に貴重です。

整形外科は分野が多岐に渡っており、骨軟部腫瘍、脊椎外科、股関節外科、膝関節外科、足。足関節外科、肩関節外科、手外科、関節リウマチ、外傷などを専門的に診る医

師が在籍し、精力的に診療に当たっています。特に最近ではコロナの影響で外傷患者の引き受け先が縮小しているのか、当科で重度外傷の治療を行う機会が非常に増えております。重度外傷の治療には先述の新入局員を始め、若手の先生方が大いに活躍しております。

基礎研究においては骨軟部腫瘍、骨代謝、骨欠損再建などの研究を主に行っています。現在、大学院生が8名在籍しており、これら大学院生が中心となって研究活動を推進しています。最近ではほとんどの学会がweb開催になり、国際学会への参加も困難なため、成果を披露する機会が激減していますが、それでも個々の研究活動に励み、論文執筆などに勤しんでくれています。

元来、整形外科の医局は非常に明るく、和気あいあいとしたムードが売りです。しかし、現在は大勢での飲食が難しく、歓迎会や送別会も行えないため、なかなか親睦が図れないのが辛いところです。また、野球部、サッカー部などの部活動も医局内の団結を強めるのに一役買っていたが、それも行っていません。早くコロナの影響が払拭され、整形外科に以前の活気が戻ることを祈るばかりです。

このような時期ではありますが、若手の育成や臨床、研究活動など、今できることに精一杯の力を注いでおりますので、今後とも整形外科教室を宜しくお願い致します。

(加地 記)

形成外科学

2017年4月に永竿智久教授が5代目の教授に就任して5年目を迎えています。

臨床では教授のライフワークとなっている漏斗胸に対する胸郭形成術が多く行われています。去年は一年間で40例以上の手術が行われました。コロナ禍ではありますが、多くの患者様が県内外問わず手術を希望し、当院を受診しております。

研究においては、工学解析、シミュレーションを用いた多くの報告をしています。ケロイドが発生する力学的メカニズム、外傷時にどのように顔面骨骨折が生じるかをシミュレーションで解析して報告しています。

今年の4月には新たに2名の入局者が仲間となりました。2人とも香川大学の卒業生です。岡山県出身の細川敦司先生、徳島県出身の赤池滯先生です。将来の香川の形成外科診療に貢献してくれると信じております。また、スタッフも2人の期待に応え、香川大学形成外科を選んでよかったと思われるよう、日々努力をしていきたいと思っております。

将来、外傷・熱傷のエキスパートとなってくれるであろう高橋宥貴（医員）、守備範囲が広くなんでも対応できる田中萌実（医員）、マイクロサージャリーを得意とする三柳友樹先生（医員）、唇顎口蓋裂などの先天異常、癌切除後の再建を専門とする玉井求宜（助教）、母斑血管腫治療を専門とする木暮鉄邦（助教）、漏斗胸、乳房再建を得意とする永竿智久（教授）で診療に当たっております。

コロナ禍で入院、手術、診療が制限される中、スタッフで今できることを確実にを行い、知識を整理し、時間を有効

に活用し、全員で成長していきたいと考えています。今後とも形成外科教室を宜しくお願い致します。(玉井 記)

泌尿器科学

2018年7月に杉元教授が就任されてから3年が経過いたしました。昨年は4名の入局という大ニュースに沸いた当科ですが、今年は可見尚弥先生1名の入局となりました。最近では県外で初期研修を行っている香川大学卒業生に対しても県外まで教授および医局長が出向いて勧誘するという積極的な勧誘を行ってききましたが、コロナの影響により行くことができず非常に悔しい思いをしています。このような状況ですが、学生や若い先生に泌尿器科に対する興味を持っていただけるよう教育などの面からも工夫をしていきたいと考えております。またコロナの影響により県内の医療機関の先生方との交流も激減しております。そこで我々がやっている最新の診療内容を広く知っていただくために、今年から香川大学医学部泌尿器科独自の広報紙『URO-info』を作成することにいたしました。日本においては香川大学が中心的役割を担っている前立腺がんに対する監視療法や小線源療法、寡分割照射による放射線治療また腎移植や泌尿器がんに対する集学的治療など、県内のほかの医療機関ではあまり取り入れられていない医療の存在を積極的に発信していくつもりです。引き続き杉元教授の強力なリーダーシップのもと患者さん中心のQOLを重視した、逃げない、寄り添う医療を目指してまいります。

(常森 記)

脳神経外科学

脳神経外科教室は、2021年4月に三宅啓介先生が4代目教授に就任されました。現在は三宅啓介教授を中心に教職員が一致団結して頑張っています。先代の田宮隆先生は病院長として引き続きコロナ対策で大変忙しくされておられます。ワクチン接種が進み一刻も早くコロナが収束することを願っています。

臨床においては、これまで治療困難であった巨大脳動脈瘤も、血管内治療に用いるデバイスの進歩により現在は治療可能になっており、脳腫瘍に対する治療も悪性腫瘍に対して電磁波を用いた新規治療を開始し、神経内視鏡も積極的に活用するなど、より充実した医療を提供できるよう努めております。そのため、ここ数年で順調に入院患者数および手術件数は増えてきております。研究分野では、脳腫瘍、中枢神経PET、脳卒中、救急など各分野において大学院生7名で様々な研究活動を行っております。「患者さま中心の治療」を念頭にこれからも精進してまいりたいと思います。フレッシュな顔ぶれとなった脳神経外科教室を今後ともよろしくお願い致します。(畠山 記)

眼科学

2018年9月に鈴間潔教授が着任され、4年目に突入しました。

今年も3名の新入局の先生を迎え、網膜・硝子体外来、黄斑外来、緑内障外来、眼循環外来、斜視・弱視外来、涙道外来の専門外来を中心として、診療・研究・教育にあたっています。

2020年は新型コロナウイルス感染拡大のため、巷では医療機関への受診控えが話題となっていましたし、待合室が密にならぬよう可能な限り予約数を分散させたり絞ったりと対策はとっておりましたが、手術件数は手術制限があったために数百件ほど例年よりは減ったものの、外来で行うレーザー治療や硝子体注射の件数はむしろ前年度よりも増えたくらいで、結果的にあまりコロナの影響は受けなかったのではと思います。

今年も3名の入局を確保できましたし、新規開業などによる退職者もなく、また育休から復帰したスタッフもあつたくらいなのですが、外来ではいくつもの治験が2020年中に続々と開始され、通常診療よりスタッフ数を必要としたり、検査もほぼすべて眼科内で行われ、手間もかかるため、まだまだ人手不足の緩和には繋がっておりません。

今後とも眼科学教室をよろしくお願い申し上げます。

(山下 記)

耳鼻咽喉科学

星川先生が教授に就任し、5、6年位になりますが、その間医局員は順調に増えております。今年度も樋口雅大先生(遊び人)と山口耕平先生(100Kg)の2名が入局いたしました。今後どこまで大きくなるか楽しみです。関連病院としては坂出市立病院、さぬき市民病院、小豆島中央病院、高松日赤病院に常勤医を派遣しております。

耳鼻咽喉科では耳、鼻、腫瘍、音声嚥下、小児難聴など専門分野が細分化しており、それぞれの分野のスペシャリストが診療に当たっております。各分野担当とも経験と実績を十分にもち、人格的にも素晴らしい人間ばかりです。また若手も徹底したスパルタ教育の賜物ですくすくと成長しております。

今年度は特に特筆するような大きなできごとはありませんでしたが、COVID-19の影響で診療には大きな制限がかかった状況でした。そのため時期によっては暇になることもあり、十分に余力を残した状態となっております。今後皆様方のご助力をいただき、地域医療にさらなる貢献を果たさせていただければと存じます。(秋山 記)

放射線医学

西山佳宏教授となり、今年度で14年目となりました。

4月に新入医局員（後期研修医）として、今上雅史先生が入局されました。

若手から中堅の先生も順調に成長し、高見先生が昨年度「放射線診断専門医」を無事取得し、活躍されています。西下先生は博士号を取得し、大学院を卒業しました。また、遠迫先生が第80回日本医学放射線学会総会でCyPos賞 Bronze Medalを受賞されました。

これからも当科ではより一層、「患者さんに寄り添う放射線診断」及び「放射線診断へ様々なアプローチによる探求」を行っていきたいと思っております。（室田 記）

麻酔学

当講座では、白神豪太郎教授のもとと医局員一同、麻酔・周術期医療、集中治療、ペインクリニック、緩和医療など幅広い分野で診療、教育および研究に精励しております。昨年度、当教室の篠瀬先生が医学博士号およびペインクリニック専門医を、小川先生が麻酔科専門医資格を取得しました。今年度も昨年度に引き続きCOVID-19世界的大流行の混乱が収まらず、本院でも突然の手術制限や学生実習禁止など非常に厳しい現実に直面しております。その上、実働麻酔科医数の不足により大変ご迷惑をおかけしておりますこと、心からお詫び申し上げます。外科系各診療科のご協力により、なんとか本院での7列の麻酔科管理手術枠体制が維持できております。本年度より、山上講師を部長として高松赤十字病院に麻酔科専門医を5名派遣いたしました。もちろん5名で充足するはずもなく、着任早々から彼らには大変多忙な日々を過ごさせてしまっておりますことも大変申し訳なく感じております。現下のCOVID-19苦境に加えて、医師の働き方改革ももう待ったを許さない状況になっており、余裕ある業務遂行体制構築や十全な医局員健康管理など、当然ではありますがこれまで看過されてきた問題をひとつひとつ克服していかなければなりません。極めて厳しい人員状況にはありますが、今後も診療・教育・研究に精一杯貢献していきたく存じますので、関係諸方面の皆様にはなお一層のご支援のほどをお願い申し上げます。

（澤登 記）

救命救急医学

救命救急センターでは黒田泰弘教授が就任後12年目を迎えました。また4月から後期研修医の梶原先生、脳卒中・循環器内科医として谷本先生を迎え新たにスタートを切りました。引き続き脳神経外科から宍戸先生、松村先生にご在籍いただき、また各科から応援医師を派遣いただいております。今年度は昨年度までより救急専属医が減りタイトな状況ではありますが、これまで以上にとても良い雰囲気、日々の診療に取り組めております。

集中治療領域ではこれまで力を入れてきた、エビデンスに基づいたプロトコール作成も進み、様々な面において世界基準の均質な治療ができるようになってきております。

研究・災害医療等も引き続き精力的に行っておりますが、来年度からはさらにドクターヘリ事業もはじまる予定となっております。関係各所との調整を進めていております。

今年度はこれまで以上に救急医療の魅力を、学生・各科の先生方・コメディカルスタッフと共有していけるよう精進してまいります。（絹笠 記）

歯科口腔外科学

歯科口腔外科学教室は、三宅 実が教室責任者として7年目を迎えました。今年度は歯科医師臨床研修プログラムを終了した1名が入局し、歯科医師臨床研修プログラムに2名が入り活気づいています。また大学院生として永峰優一、今城広治の2名が学位を取得しました。また昨年4月より独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センターに歯科口腔外科が開設され、岩崎が常勤で口腔外科治療、障がい児（者）歯科治療、周術期等口腔機能管理を行っております。かがわ総合リハビリテーション病院歯科には、南、芳地が常勤で、障がい児・者に対し専門的で安心できる歯科医療を提供しています。和歌山県田辺市紀南病院には宮嵩が外向しています。

当科では従来の口腔外科疾患に加え、がん患者等の周術期口腔機能管理、歯科インプラント、歯の内視鏡下およびマイクロスコープを使用した歯根端切除術、内視鏡下唾石摘出術等の個々に応じた最善の医療を提供しています。

今後も香川県内の歯科口腔外科診療における基幹病院、“最後の砦”としての役割を担いつつ、チーム医療の充実、臨床に役立つような研究、リサーチマインドをもった医療人の育成に邁進してまいります。（大林 記）

内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学

内分泌代謝内科は村尾孝児教授のリーダーシップのもと、一致団結して臨床、研究、教育に励んでおります。幸い、当科では村尾教授が就任以降、毎年新規入局者を迎えることができ、また女性医師も多く、今後も若い先生方に選んで頂けるよう、より一層内分泌代謝学の魅力を伝え、さらに働きやすい環境を整えてまいります。診療面では、2018年度以降は外来患者数が1万人を突破し、入院患者数も年々増加しております。2020年10月には第58回日本糖尿病学会中国四国地方会（会長：村尾孝児）、2021年2月には第66回日本臨床検査医学会中国四国支部総会（会長：井町仁美）を主催し、当初は新型コロナウイルスの影響も懸念されましたが、医局一丸となって準備に取り組み、無事開催することができました。対外的には、希少糖臨床応用についての共同研究・開発を香川県・国際希少糖教育研究機構・地元企業と産官学一体となりプロジェクトを進めております。また香川県歯科医師会との医科歯科連携事業、かがわ糖尿

病療養指導士育成事業など多岐にわたるプロジェクトを展開しております。これからも皆様から信頼される内分泌代謝領域の診療を行い、香川県の内分泌代謝学の発展に貢献できるように精進してまいりますので、今後とも宜しく願い申し上げます。(小林 記)

臨床腫瘍学

近年、がん診療はがんを標的とする分子標的治療の進化、がん免疫療法の登場、ゲノム解析によるがん個別化医療など新たな時代の幕開けを迎えています。2015年2月の講座新設以来、臓器横断的ながんの集学的治療をはじめ、地域連携、がん予防の啓発、支持療法・緩和ケアの推進とともに、治験や多施設共同の臨床試験による先進的な診療に力を入れています。

2019年には、附属病院スタッフの皆様や学内の関係講座の皆様のご協力・ご指導のおかげで、四国の大学病院としては初めての、がんゲノム医療拠点病院の指定を受け、がんゲノムによる精密医療の実践に踏み出しました。本年度は昨年度よりもさらに多くのがん遺伝子パネル検査を実施しており、今後がん患者さんや地域の方々に最良で最新のがん診療を提供していきたいと考えています。また、近年は希少がん（肉腫・神経内分泌腫瘍・原発不明がんなど）診療にも力を入れており、さらに治験や多施設共同臨床試験などの新規治療開発にも取り組んでいます。

今後もよりよいがん診療を行うために努力してまいりますので、皆様の引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。(奥山 記)

総合診療医学

総合診療医学では4人のスタッフがそれぞれのSubspecialty専門領域（循環器、消化器、脳神経内科）を生かしながら総合内科として診療を行っています。発熱、全身倦怠感、体重減少など受診時にはすぐに診断がつかない患者さんを対象として診断、治療にあたっています。大学病院は全診療科が専門医の集団ですが、その中でこそ総合診療的な診療が必要な場合もあり、当科が果たすべき役割と考えています。

2018年から新専門医制度が開始され、本教室では「香川大学総合診療専門研修プログラム」を作成し、大学病院と香川県内の地域の病院とをローテーションしながら総合診療専門医資格を取得できるプログラムを用意しています。研究面では各スタッフが専門領域に基づく研究を行い学会発表、論文執筆を行っています。

診療、教育、研究面での本教室の役割を果たせるよう努力してまいりますので今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。(舩形 記)

放射線腫瘍学

2012年1月の活動開始以来、「高精度放射線治療の基礎的・臨床的研究の推進およびがん治療の将来を担う専門医の育成」を目標に掲げています。放射線治療専門医・指導医として柴田教授・高橋助教が、放射線科専門医として穴田医員が常勤し、専攻医として西出医員・香西医員が研鑽を積んでいます。

臨床面では、2014年度に導入した治療技術の高度化に対応した機器を用いて、強度変調放射線治療（IMRT）・画像誘導放射線治療（IGRT）等に積極的に取り組み、前立腺癌や頭頸部腫瘍だけでなく、脳腫瘍や子宮頸癌に対するIMRTの実績を増やしています。通常照射・定位照射（いわゆるピンポイント照射）・小線源治療等と合わせ、年間450例前後に治療を行い、診療報酬の増収を達成しています。

研究面では、2021年3月に片山が、医学物理に関する成果をもって晴れて医学博士号を取得しました。現在、木下ががんプロ大学院生として、子宮頸癌放射線治療の課題に取り組んでいます。また、科研費にも採択され、国内外の学会や英文論文で成果をコンスタントに発表しています。

皆様には臨床や共同研究でお世話になっておりますが、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

(高橋 記)

医療情報学

コロナ禍は続いており、本文を執筆しているのは、7月上旬、オリンピック直前に東京などに緊急事態宣言が出され、また首都圏のオリンピック競技会場は無観客が決まった翌日です。デルタ株の席卷のせいなのか、首都圏の感染者は連日増え気味になっています。

医療情報部は、直接的に診療に携わる部門ではないので、新型コロナの業務への影響は決して大きくありません。

一方我々は、2022年6月に日本医療情報学会の春季学術大会を引き受けており、その実施方法で頭を悩ませています。同大会は通常1000人から1500人が集まる全国大会ですが、これをWebのみで行うか、現地会場を設定してWebとの「ハイブリッド」で行うか、その岐路に立たされています。ハイブリッドで行うと、各講演会場に音響調整機器とそのオペレーターを配置しなくてはならず、コストが非常に上がります。一年後の状況が全く予想できない状態で、どのような学会を作ればいいのか問題山積でめまいを起こしそうです。しかし、情報通信技術を用いて社会に変革をもたらし、またこのような難局を打開していくのも我々の本分と考え、進んでいこうと思っております。(横井 記)

薬剤学

薬剤学教室では、安全で安心な薬物療法の支援を行うために医薬品の機能・副作用の評価、薬物血中濃度の測定手法の研究開発および医薬品の投与方法などのテーマで研究を行っています。医薬品本来の治療効果を十分に発揮するように、また、適正な薬物療法を行うことが出来るように研究を行っています。

がん化学療法を施行する上で患者さんの腎機能は、治療のための抗がん剤の量を決定する重要な因子の一つです。そこで、電子カルテ内の腎機能データと医薬品の特性情報をエクセルでマッチさせ不適の場合に薬剤部へアラートを発信するシステムを構築しました。

今年度は、大学院生も1名加わりさらに医薬品の安全使用のための研究を推進してまいりたいと考えておりますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(小坂 記)

健康科学

香川大学医学部医学科同窓生のみなさま、いつもたいへんお世話になっております。

2021年4月1日付けで健康科学 教授を拝命いたしました塩田敦子です。どうぞよろしく願い申し上げます。東京医科歯科大学を卒業して産婦人科医となり、結婚後香川大学に20年以上在籍し、8年半香川県立保健医療大学で教鞭をとった後帰ってまいりました。

健康科学講座は、医学部看護学科での学部教育、大学院教育の一端を担う医学系の教室であり、主に「人体の構造と機能」および「疾病の成り立ちと回復の促進」について筒井邦彦准教授とともに講義を行っています。看護研究や院生の指導、また全学共通科目でのゼミ、医学科での統合講義の一部も担っており、臨床では附属病院での診療、研究では医学科の教室の先生方とも連携させていただいております。同窓会の先生方と協働・連携のできる専門的知識と幅広い人間力を持った看護師、助産師、また看護学修士の育成に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

(塩田 記)

同窓会理事選挙

令和4年・5年度理事候補推薦用紙

現在の理事は、令和4年（2022年）3月に任期満了となりますので、会則9条及び会則25条にもとづき選挙を施行します。つきましては、各卒年同窓の理事候補推薦をお願いします。

理事選挙に際しては、現在の理事、執行部役員を含む全ての方を対象にご推薦下さい。但し、特別役員（母校教授就任者）は除きます。現在の理事及び執行部役員、特別役員（母校教授就任者）は裏面を参照下さい

正会員（貴方と同じ卒年）の中から適任と思われる理事候補を推薦して下さい。（4名以内）

()

()

()

()

令和3年 月 日

名前

卒年 S・H・R・院修了

記入の上、返信用封筒で返送下さい。FAX、メールでも結構です。

【締切11月末日必着】

問合せ先：讃樹會事務局

TEL/FAX 087-840-2291

E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp

次年度理事候補推薦のための参考資料

現行年度（令和2年4月～令和4年3月）の役員一覧

会長 顧問 副会長

役職	氏名	卒年	役職	氏名	卒年
会長	平川栄一郎	S61	名誉会長	濱本龍七郎	S61
顧問	高橋 則尋	S61	顧問	佐藤 清人	H元
副会長	大森 浩二	S61	副会長	安岐 康晴	院H3
副会長	中村 丈洋	H7	副会長	星川 洋一	H7

執行部スタッフ

役職	氏名	卒年	役職	氏名	卒年
事業局長	出口 一志	S61	教育研修支援局長	安田 真之	H9
広報局長	谷 丈二	H14	副局長（内科系）	土橋 浩章	H4
学術局長	西内 崇将	H12	副局長（外科系）	岡野 圭一	H4
学術局副局長	福長 健作	H21	副局長（地域医療）	市原新一郎	H3
事務局長（兼任）	安田 真之	H9			

特別役員（※母校出身母校教授） 就任年順

	氏名	所属	卒年	氏名	所属	卒年
代表	西山 成	薬理学	H5	星川 広史	耳鼻咽喉科学	H2
	正木 勉	消化器・神経内科学	H2	三宅 実	歯科口腔外科学	院H3
	西山 佳宏	放射線医学	H2	杉元 幹史	泌尿器科学	S63
	木下 博之	法医学	H4	金西 賢治	周産期学婦人科学	H5
	横井 英人	医療情報学	H8	松田 陽子	腫瘍病理学	H10
	村尾 孝児	内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学	H2	小坂 信二	薬剤学	院H25
	日下 隆	小児科学	H3	三宅 啓介	脳神経外科	H5
	三木 崇範	神経機能形態学	H3	横平 政直	医学教育学	H11
	舛形 尚	総合診療医学	S61			

理事

卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名	卒年	氏名
S61年	植村 信久	H6年	浅賀 健彦	H15年	門田 球一	H25年	水田 志
S61年	大西 宏明	H7年	井町 仁美	H16年	大島 稔	H25年	内田 俊平
S62年	河井 信行	H7年	高尾 努	H16年	小谷野耕佑	H26年	形見 祐人
S62年	形見 智彦	H8年	野間 貴久	H17年	今井 秀記	H27年	小畷 洋和
S63年	西田 智子	H8年	村田 晶子	H17年	築瀬 賢	H27年	合田衣里奈
S63年	横井 徹	H9年	上田 修史	H18年	篠原奈都代	H28年	佐伯 岳信
H元年	上枝 宏和	H9年	村上 和司	H19年	石川 一朗	H28年	濱田 康宏
H元年	北条 聡子	H10年	岡内 正信	H20年	中野 裕貴	H29年	綾井 健太
H2年	羽場 礼次	H10年	金地 伸拓	H21年	木戸 瑞江	H30年	佐藤 雄大
H2年	吉田 智子	H11年	安藤 延男	H22年	尾崎 洋基	H30年	村岡 拓
H3年	中條 浩介	H12年	亀田 智広	H22年	千代 大翔	H31年	岡本 夏海
H3年	坂東 修二	H13年	泉川 美晴	H23年	野口 勝宏	H31年	木村 駿吾
H4年	田井 祐爾	H13年	中村 修	H24年	小林 俊博	院H8	小川 尊明
H4年	政田 哲也	H14年	佐野 愛	H24年	松井 崇矩		
H5年	川西 正彦	H14年	森 照茂				

編集後記

新型コロナウイルスの猛威は、変異株の登場でまだまだ収まる兆しがみえません。対策慣れしつつある医療現場と新しい生活様式と自粛疲れが、まるで螺旋階段のように、同じところをぐるぐる回っているようですが、いつか明るい空が見えるのでしょうか。ワクチン接種も始まり、人類のウイルスとの戦いは第二幕を迎えています。香川大学の職域接種や香川県大規模接種も香川大学医師は積極的に全医局を挙げて、この難局をなんとか乗り越えたい思いで参加しています。

同窓生教授就任挨拶を、6名の先生よりいただきました。讃樹會も、明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。

さて、特集として卒業記念に思うpart3を掲載しております。懐かしい風景が掲載されております。また、ニュースの窓では医学科6年生が実習で指導を受けた医学論文が国際医学誌に掲載されていますので、ご一読ください。

関連病院紹介では同窓生が院長をされているJCHOりつりん病院の特集と、留学レポートを掲載しています。同窓生が活躍している様子を伺えます。ここで、悲しい話題ですが香川大学医学部を1期生として支えていただいた泌尿器科の武田繁雄先生への追悼記を杉元幹史教授に寄稿いただき、讃樹會からも安らかなご冥福をお祈りさせていただきました。田中淳一郎先生のカートレースや「創部ものがたり」で懐かしさを感じていただけたら。

オリンピックが終了した今日編集後記を執筆しています。個人的には五輪開催に賛成してきましたが、反対意見にもうなずける部分が多々あります。新型コロナの感染状況はどうなるのか、ワクチン接種はどれほど進むのか。状況は刻一刻と変化しています。オリンピック、パラリンピックを開催して良かったと思える日が来ることを願っております。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくお願い申し上げます。

広報局長 谷 丈二 (平成14年卒・17期生)

事務局からのお知らせ

◆同窓会事務局のメールアドレスが変わります。

従来のdousou@med.kagawa-u.ac.jpは
2021年9月末まで。

2021年10月1日以降

mddousou@kagawa-u.ac.jp

移行後、古いアドレスにメールした場合でも、新規のメールアドレスへ転送されますが、早めに同窓会事務局の新規アドレスをご登録下さい。

◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています (途中加入ができます)。詳細は事務局にお問合せ下さい。

◆国外留学助成金の募集は現在中止しています。

◆研究助成金／研究奨励金の申込締切は毎年4月末日です。ふるってご応募下さい。

